Hard Beat　1st

佐倉薫流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｈａｒｄ　Ｂｅａｔ　１ｓｔ

【Ｎコード】

Ｎ７３４０Ｅ

【作者名】

佐倉薫流

【あらすじ】

世界的極秘機関「Ｍ．Ｉ．Ｃ．Ｅ」、正式名称「国際秘密凶悪犯罪取締執行機関」所属で唯一の日本人、綾野小次郎が警察では扱わない・扱えない事件を裁いていく。今回は後のパートナーとなる男との出会いがメインに事件が展開していく・・・？！

1、綾野

それは、夜だった。
東京にある、コンクリートでできたグランドキャニオン。
その上から彼は足元に広がる、動く谷間を見下ろしていた。
彼はサングラスをはずし、天を仰いだ。
そこは、漆黒の闇しか存在せず、彼はまた、視線を動かした。

「・・・そこか」

そうつぶやき、手に持っていた冷たい金属の塊を握りなおしてゆっくり、歩みだした。
わずかな明かりに照らされながら、彼は金属の塊を胸元、そして、顔の前に持っていき、息を呑んだ。
薄墨のような闇の中、何かが動いた。
彼はそれを見逃さなかった。
彼は獲物を追いかける獣のように、それを追いかけた。
それは、彼が思っているよりも速かった。
ぐいぐいと彼とそれの距離が縮まっていった。
やがてその距離はなくなり、彼はそれの上に乗りかかった。

「抵抗すれば、撃つ」

彼は、それに冷たい金属の塊の先を押し当てて、そういった。
それはその言葉に従うように、ぴくりとも動かなかった。
それは、最近世間を騒がしていた凶悪レイプ・殺人犯だった。
それ、いや、男はＯＬばかりを狙い、レイプし、証拠隠滅とともに彼女らを殺すという凶悪極まりない犯罪人なのだ。
一度、ひょんな事で逮捕されたのだが、レイプに関する証拠がな

く、そのまま野放しになっていたのである。

警察でもこの男が犯人であると確信があったのだが、証拠がなければ犯人とはっきり特定できないため、やむなく釈放、そしてその後、世界的に極秘機関である「M・I・C・E」、正式名称「国際秘密凶悪犯罪取締執行機関」の一員で唯一の日本人、綾野小次郎、つまり彼に、男を裁いて欲しいと依頼したのである。

「あんたが何者か知らねぇが、俺を捕まえたところで警察じゃなにもできねぇぜ」

男は綾野に言い放った。

綾野は金属の塊を男に突きつけたまま、目を細めていった。

「お前、知らぬが仏という言葉を知っているだろう。そう、その通り、知らないほうが幸せだという意味だ。

だがな、何でもそれがよいとは思っていないだろう?」

「何が言いたいんだ?」

男は金属の塊に動じることなく聞いた。

「知っていれば、こんな馬鹿なことをするやつは減る、しかし、世間にはあまり知られたくない、そういう職業についているんだよ、俺は」

「は?」

「お前にもわかるように、平たく言えば、俺は秘密警察みたいなものなんだよ」

綾野は男から目を離すことなく言った。

「だから何なんだよ？俺を逮捕するってか？
俺が犯罪を犯したって言う証拠は？
そもそも俺はいったいどんな犯罪を犯したって言うんだ？」
男はにやけながら言った。

「都合よく記憶喪失か？忘れたのなら教えてやろう。
お前は何人もの女をレイプして、そして殺した」
「その証拠は？」
「目撃者がいる」
「それじゃあ俺をしょっ引けないなぁ」
「物的証拠はない。だが、証言なら腐るほどある」
「証言だけなんて、頼りないなぁ。裁判じゃぁ勝てないぜ」
「そうだな」
「呑気だなぁ。で、これから俺をどうしようってんだよ？」

綾野は笑みを浮かべた。
口の横にえくぼのような、たてに笑いじわが一本できる。
特徴のある笑みだ。

「お前、今日一人、やり損ねた女がいるだろう」
「は？何いってんだい？」
「することを最後までして、その後、いつものように後始末をした」
「何のことかね」
「しかしな、偶然お前が用済みの玩具を捨てた場所に通りがかったんだよ、俺」
男は綾野の言葉に反応するかのように、顔の筋肉に力を入れた。

「俺、びっくりしてさぁ、慌ててその女のところへ行ったんだ。
そしたら、まだ息があったんでね、応急処置をして、病院へ連れて行った。
そしたら応急処置がよかったようでね。
もう命に別状がなく、病院でゆっくり休養しているよ」

男の眼をじっと見つめて綾野は言った。

「彼女、もしも裁判になったら、証言してくれるって言ってたよ」
「ハン、甘いな。
外国の裁判ならどうかしらないが、日本の場合は状況証拠だけでなく、物的証拠とかはっきり犯罪を犯しましたという動かぬ証拠がないと裁けねぇんだぜ？」

犯人はさらに顔の筋肉に力を入れて言った。
心なしか、その声に力が入っているように思える。

「だから、俺がこうやって動いている。
警察に一任されたし、俺の所属する機関にも許可を取った。
だからお前は俺が裁く。わかったか？」

綾野は表情を変えることなく言った。

「お前が裁くって？
決定的な証拠があるわけでもあるまいし。
そんな勝手なこと、世間じゃぁ許されないぜ？」

そう話す男の声が少し、引きつっているようにも聞こえる。

「決定的な証拠？

はっきり言ってしまえば、今日会った女性の話と今までの証言で十分だ。
それにな、今お前をどうするかは俺の意思にゆだねられているんだぞ？」
「お前の意思か・・・どうするつもりだ？この場で死刑にするか？」
男は引きつりながらも、開き直っている様子だ。
「誰が殺すといった？
俺はあくまでお前を裁くと言ってんだ。
だから、今からお前をどうするか教えてやろう。
お前はな、これから５０年、Ｍ．Ｉ．Ｃ．Ｅ．に所属する刑務所に行くんだ。
そして、自分が今までやってきたことを十分反省するんだよ、わかるか？」
「わかんねぇなぁ。第一、Ｍ．Ｉ．Ｃ．Ｅなんて聞いたこともねぇ」
男は綾野を小馬鹿にしていった。
そんな男の態度に動じることなく
「わからないならわからないでいい、行けばどういうことか身に染みてわかると思うよ」
綾野はそういうと、男の手首に手かせをつけた。
そして、男を引っ張るように立ち上がり
「少しだけその刑務所がどういうところか言うと、完全犯罪をするような凶悪犯とか、女に飢えた男の犯罪者がたくさんいるところ

だ。

まあ、知らぬは仏を言うし、後は行って見てのお楽しみだ」

こう言い放った。

男はこの言葉の意味がいまいち良くわかってないのか、綾野の顔を見ながら「馬鹿じゃねぇの」とつぶやいた。

綾野はこれからこの男に降りかかる災難の日々を知っているのか、男の小言に相手することなく、男とともにその場を去った。

2、依頼

ある町の一角、電車が走る陸橋の下に店があった。
天気は快晴、空に浮かぶ雲をすべて飲み込んでしまったのか、天は透き通る青さを主張していた。
店の入り口付近には少年が何人か集まっていた。
その中心は、ミニ四駆を遊ばせるための小さな広場になっていた。
時々、その少年よりは年を重ねた男性がそこの奥にある入り口に向かって歩み、そして店の中へ入って行く。
上のほうにある看板には

『ＡＹＡＮＯ　ラジコン・おもちゃ　模型堂』

と書いてあった。

店の中では先ほど入ってきた男性と、店主と思われる男の二人しかいなかった。
先ほどの男は無造作に飾ってある商品の品定めをし、店主と思われる男はガラス戸でできた出入り口から外にいる子供達の様子を笑みを浮かべながら眺めていた。
その口の横には縦に深く入った、えくぼのような皺があった。
楽しそうに遊んでいる子供達から目をそらした時、ドアの開く音がした。
店主と思われる男はいつものことなのか、気にすることなく気にすることなくカウンターの中にあるコンピュータに目をやった。

「あなたが綾野さんですか？」

店主と思われる男はその声の方に視線をやった。

そこにはこの店に似合わない、背広を来た女性が立っていた。

「そうですが。何かお探し物でも？」

店主、いや、綾野はその女性の目をみつめて答えた。

「いいえ。警察から派遣されたものです」

女性は周りのことを気にすることなく答えた。

綾野はふと気まずい顔をして、店にいつもう一人の男性の方に視線をやった。

「少し、待っていただけませんかね」

綾野は表情を変えずに女性のほうを向いて言った。

女性もそれを察したのか

「ええ、構いません」

そう言い、にっこり微笑んだ。

しばらくしてもう一人の男性が用事を済ませて店を出て行った。

綾野はそれから少し時間を置いて、店の外へ出た。

「あれ、おじさん、もう店閉めちゃうの？」

綾野が「ＣＬＯＳＥ」と書かれた札をドアにかけているのをみた少年の一人が聞いた。

「別に終わりではないんだけどね、ただ、ちょっと今はお店の中

には入って欲しくない状況でね。
そこで遊んでても構わないから、もしも店に用のあるお客さんが来たら後でまた来てくれって言っといてくれない？」
綾野はいつものことなのか何気なく言った。
少年達もわかっているようで
「わかった。どうしても用があるときはドアを叩くよ。
ま、めったなことじゃ叩かないけど」
と答えた。
「ありがとう」
綾野はそう言うと店の中に入っていった。
「また、ネズミがでたんだね」
「前もネズミが出てきたって大騒ぎだったもんね。商品かじられたら大損害だって」
「しょうがないよ。二件隣とすぐ隣が食堂だもん。かあちゃんがそういってた」
そんなことを話しながら少年達は構わずミニ四駆で遊んでいた。
■□■
綾野はドアにブラインドを掛け、そして、女性のほうに向いた。
「で、この間の凶悪レイプ犯を片付けさせて、お次はなんだ？
言っておくが俺は何でも屋ではないぞ？

お宅らで解決できるものはお宅らで解決して欲しいがね」

綾野は迷惑そうに言った。

「あれだって、私達警察が解決できるならそうしたかったわ。でも、下の者がいくらそう願っていても上の者が嫌がるのよ。だからやむなくあなたに頼んだわけ」

「言い訳にしか聞こえんがね」

女性の言葉に綾野は軽く嫌味を加えて聞き流した。

「まあ、そんなことは済んでしまったことだしいいとして、今度は何だ？」

綾野は頭に手をやりながら言った。

「実はわが国のとある刑事が越権行為をしているの」

「は？！」

突拍子のない内容に思わず気抜けしそうに綾野が返答した。

「その刑事なんだけど、実はとある政治家を落としいれようとしているの」

「ちょっと待てよ・・・」

「それで、その刑事を・・・」

「内輪のことはごめんだぜ？」

綾野は話の途中で断りを入れた。

「第一そんなことぐらい、お宅らで解決できるだろう？なんで俺

なんかに頼むんだ」
「あなたじゃないと太刀打ちできないって上司が・・・」
「いいかげんにしろよ」
綾野は顔を強張らせて言った。
「俺らM・I・C・E・はは、警察が手に負えない凶悪犯罪を裁く組織だ。お前らの使いでも犬でもないんだ。
その辺をきちんとわきまえてもらえないとただじゃあ済まされんぞ？」
綾野のそんな言葉に女性は
「言いたい事はわかるわ。でも、一応最後まで話を聞いて頂戴」
「・・・わかった。一応聞こう」
「ありがとう。それで狙われている政治家のことなんだけど、彼は老人や障害者、失業者やホームレスに援助金を出したり、施設を作ったりしている、政治家にしては珍しく、善良な人なのよ」
「もしかして、主民党の“霧山　賢四郎”か」
「そうよ。あなたも知っているかもしれないけど、国民に絶大の支持を受けている政治家で、他の政治家には嫌われている彼よ」
「俺は支持していないけどね」
「だから、もしかしたらその刑事、他の政治家に頼まれて霧山賢四郎の身辺を調べているのかもって見ているのよ」
「それが越権行為になってるってか？」
「そういうことなのよ」
「でも、その刑事も何の根拠もなく調べているわけではあるまい」
「確かにそういう可能性もあるわ、でも彼、何も語ってくれないし、何の許可も受けずにいろんな資料勝手に見てるし、何よりも若くて野心家なのよ」

「ほう」
「それで、あまりにその行為がひどいから今は休暇を取らせているんだけど、それでも調べるのをやめないの」
「だったら辞めさせちまえよ」
「それができたらここに頼みに来ないわ。
いろんな理由で辞めさせることができないの。
だから、事が起こらないうちにあなたに何とかしてもらいたくて」
「なぜ探偵に頼まない？」
「探偵は当てにならないし、万が一、マスコミにでもたれこまれたらただじゃぁ済まされないわ」
「だから俺に頼みに来たわけか」
「そうよ」

女性はすべてを話しきれて安心したのか。体の力を少し抜いた。

「それでどう？引き受けてもらえるかしら？」
「その刑事の見張り番か」
「そう、そして状況によっては彼を裁いてもらいたいの」
「・・・・・・・・・・・・まあ、悪くはないな。
他の仕事に比べれば危険性も少ないし、何よりも楽だ。
それに、その政治家も世間的にも好感を持たれていて、弱者の援助をしているときてるし、賄賂をもらっているという噂もあまり聞かない。
国民の願いであるという風に考えれば引き受けてもいい」

綾野は少し表情を和らげて言った。
女性も安心したのか、表情がにこやかになった。

「それで、引き受けるとなると、わかっていると思うが・・・」
「ええ、捜査の方法、裁き方、それによる結果に対しては口出し

をしない」
「それと、協力もする」
「わかったわ。では、報酬は事件解決後、いつものようにさせてもらうわ」
「それで、その問題の刑事だが・・・」
綾野がそう言うと、女性は持参のカバンからＡ４サイズの封筒を出し、綾野に渡した。
「その中に彼のデータが入っているわ。詳しいことはそれを見て頂戴」
「ああ」
「それじゃあ、よろしく」
女性はそう言い残し、店を出て行った。
辺りはすっかり暗くなっていた。
店のシャッターを下ろし、綾野は店の二階にある自宅で食後の後片付けをしていた。
彼に家族はいない。
机の上に飾ってある、とある家族の写真のみが、彼以外のそこに居る人間である。
その写真には3人の一家の楽しそうにしている光景が写っていた。
子供を抱いている父親らしき男はどういうわけか綾野に良く似ている。
その男の隣にはかわいく微笑む、恐らくその男の妻であろう、美しい女性の姿。
その光景は、誰が見ても幸せ、そのものであった。
そんな面影のかけらもない部屋で片付けを終わらせた綾野はその

写真に目をやり、深くため息をついた。
そして、昼間貰った封筒から中身を取り出し近くにあったソファーに腰掛けた。

『那木貴也、年齢２６、性別男、身長１８５ｃｍ、体重７２ｋｇ。
東大では心理学を学び、４年で卒業。
キャリア組の中の屈指のエリートで成績も優秀、並外れた勘と行動力の持ち主で、強行犯捜査一課に所属。
現在は警部、後輩からの人望が厚く、熱血漢である。
しかし、猪突猛進な部分あり、時々問題のある行動に出ることもある』

「絵に描いたような好青年じゃないか」

綾野は呟いた。

「ふむふむ、なかなか現代的なハンサムボーイだな」

同封されていた写真を見ながら、文書の続きをペラペラと眺めていた。
あまり、参考になるような文書がないのか、ソファーの背もたれに寝そべるようにもたれかかり、眠そうな目でそれを眺めていた。
ふと、綾野は紙を捲る手を止めた。

『１６歳の時、家族が交通事故で死亡。
彼は家族の保険金と親族の援助で高校、大学へ行く事となる』

「・・・なるほど、四人家族だったのか」

途中で目にした情報とそれを照らし合わせてみた。

「しかし、何で交通事故に遭ったのかが書かれてないな。交通事故の記録ぐらい、調べりゃわかるだろうに」

綾野は少し不審に思った。

しかし、さほど重要な情報ではないのだろうと納得することにした。

「さしずめ、彼だけ部活かなんかで家族と一緒じゃなかった時に事故が起きたのかな」

綾野はそう言いながら、ふと机の上にある写真を見た。

そして、物思いにふけりながら、朝剃ったはずの髭を右手でさすった。

「辛かっただろうな」

こんなことを思いながら再び、紙をペラペラ捲り始めた。

時々聞こえる電車の通る音と紙を捲る音と共に、綾野の夜は更けていくのであった。

3、那木

空は灰色だった。
鼻を突くような臭いを漂わせて、辺りは少し薄暗い感じであった。
霞ヶ関にある建物の一室。
彼は、窓の中からその重苦しい風景を眺めていた。
そこは、皇居の桜田門前にそびえ立つ、地上１８階、地下４階のビル、警視庁である。

「もうすぐ雨が降ってくるな・・・」

誰もいない部屋で一人、彼はそう呟いた。
そして、机の縁に寄りかかり、深くため息を吐いた。
とその時、誰かが部屋に入ってきた。
彼は気づいていたが振り向かなかった。

「あれ、那木さん、休暇中じゃなかったんですか？」

その声に反応するかのように、彼、那木は振り向いた。

「休暇中にちょっと書類を片付けようかと思ってね、来てみたんだ」

整った顔を笑わせて那木は言った。

「那木さんのやるような書類は今のところありませんよ。
というよりも、那木さん、休暇中なんだから書類仕事もしちゃいけないんじゃないですか？」

那木に声をかけた男は悪気の気配をまったく感じさせることなく言った。

「でも、この捜査一課で那木さんが欠けるのは正直言って辛いですよ」

「ハハハ」

那木は苦笑いを浮かべた。

男もつられて笑った。

「でも、那木さん、どうして霧山議員のことを調べまわっているんです？

理由を言ってくれないからこんなことになるんですよぉ」

男は少し甘え気味に言った。

どうやら男は那木の後輩らしい。

「ないわけではないけど、まだまだ言うほどの理由はないんだ」

「まだまだって？」

「まあ、あまり迂闊なことを言うと、俺自身の刑事生命が危うくなるかもしれないんでね。

無難なところで言うと、どうしてあれほどの行動をするだけの金があるのかなぁって事かな」

那木も人が良いのか、客観的なところで対応をした。

「そりゃ、政治家ですからね。お金にはそれほど不自由していないんじゃないですか？」

「でも、聞くところによると、賄賂とかあまり貰っていないって話じゃないか？

いくら政治家とはいえ、あんな高額な援助金やたくさんの施設を建てれるほどの金を持っているとは思えん」
「お金とは別のものがあるんじゃないですか？
霧山議員は国民に絶大な人気がありますし、福祉団体からの援助金とかで賄っているんですよきっと」
「そうかな」
「そうですよ。それに、あの人あまりにも良いことをじゃんじゃん実行してしまうので他の政治家には嫌われていますし、どうして那木さんがそこまでして霧山議員にこだわるのか理解できません」

男は那木をじっと見つめて言った。
那木は男から視線をそらし、遠くを見た。
しかし、男は那木の次の台詞を待つように見つめていた。
那木はその視線に耐えかねてか、小さく咳払いをして言った。

「本当のところ、俺の勘なんだ」

那木は思いっきりの笑みを浮かべた。
男はただ、目をぱちくりさせていた。

■□■

那木はどこかの町の商店街を歩いていた。
靴屋、洋服店、アクセサリーショップ、スーパー、デパート、やはり若さであろう、カジュアルショップの店頭に飾ってある新製品のGパンを手に取り眺めていた。

「熱で色が変化するなんて、おもしろいなぁ」

いろんな種類のGパンを見ながら鼻歌を歌いながら品定めをして

いた。

「でも、寮のやつらになんて言われるかわかんねぇしなぁ・・・」

Gパンの色を変色させながら考えているようだ。

「でも、やっぱり買おう！」

そういい、自分に合うGパンを持って店の中に入って行った。

『普通の若者だねぇ』

しばらくして店から出てきた那木は、軽やかに歩き出した。

『今度はアクセサリーか？』

那木は男性専用アクセサリーショップに入っていた。

彼は飾ってある商品には目もくれずにカウンターの方に行った。

「この間注文したやつ、できてる？」

カウンターに前のめりによしかかり、片方の足のつま先を床にトントンとやりながら店主に聞いた。

「出来てますよ、ちょとお待ちください」

店主はそう言うと店の奥に入って行った。

『今は特注で作ってもらえるのかぁ』

「はい、これ。なかなかイカしてますよ」

店の置くからでてきた店主はそう言いながら品物を那木に見せた。

「銃弾をネックレスにするなんて、カッコ良いですよ！」

『へえ、銃弾をねぇ、あの若者なら似あいそうだねぇ』

那木は勘定を払うと店を出た。
歩きながら先ほど買ったネックレスを着けた。
そして、近くに止めてあったフィルム貼りの車の窓ガラスから自分のその様子を見た。

「なかなかイカしてるなぁ」

口の端を思い切り上げてそう言うと、再び歩き出した。
那木は少し、歩くスピードを上げた。

「ひえぇ、なんかポツポツ来てるぞ」

こう言い、コンビにに入って行った。

『うわぁ。雨だよ』

まもなく雨が降ってきた。

那木はコンビニに入ると雑誌類が置いてあるところへ行き、少年誌を開いた。

しかし、その視線はなぜか本ではなく、あちこちに散らされていた。

「・・・誰かに見られている」

那木は心の中で呟いた。

窓に映る店内の様子を那木はじっくり窺った。

暇そうにしている店員は2人、お菓子を選んでいる子供が4人、自分と同様に立ち読みをしている男が一人、しかしこの男は見るからに本に見入っている。

そのまま窓の外を見ると、突然の雨に皆大慌てで近くの店に入ったり、雨のあたらないところで雨宿りをしたり、車は雨の影響をそれほど受けることなく冷静にワイパーを動かしている。

怪しいと思われるものは道に数台駐車している車のうち、中に人間が乗っている者だろう。

一台は父親とその子供達だろうか、おそらく近くのスーパーで買い物をしている母親を待っていると思われる。

一台は仕事をサボっている営業マンだろうか、移動用の車の中で顔に新聞紙をかぶせて眠っている。

そしてもう一台、30代後半ぐらいの男が道に迷ったのか、地図帳を眺めていた。

ふと、その男が那木の視線に気づいたのか、那木とその男の目が合った。

那木は瞬きもせず、その男を見ていた。
その男は、そんな那木の視線に応えるかのように、広げた地図帳をひょいと上げて、苦笑いを浮かべていた。
やたらに口の横に深い笑い皺が目立つ男だ。
那木はその男が何を言いたいのか悟ったのか、そうではないのか、笑みを返した。

「大宮ナンバーということは、あまりこの辺の事を知らないのか」

そんなことを思いながら、那木はその男から視線をはずした。

「気のせいか、でなければ相当のプロだな」

那木はそう呟くと、広げていた少年誌を閉じ、元の場所に戻し、レジの方へ行き、すぐ横にあったいつもよりも数字が膨らんだビニール傘をかい、店を出て行った。

■□■

夜になり、雨は一向に弱まることはなかった。
雨の振る音は周りの雑音をすべてかき消し、自分の語る音以外のすべての音の存在を否定するかのようであった。

「いやぁ、本当にしばらくぶりだなぁ、綾野」

ごく普通の建売住宅の一室にて、片手に水滴のついたビールの入ったコップを持ちながら、中年の男は言った。

「しかし、お前が警察を辞めてしまったのは惜しいことをした、お前に会うたびにそう思うよ」

「まあ、自分の意思で辞めたことだ」

中年男の言葉に困る様子もなく、綾野はつまみの枝豆を口に入れながら話した。

「自分の意志ってお前、あのままいけば長官にだってなれたんだぞ？」

中年男は少し酔っているのか、感情的に言った。

「地位にも金にも興味はない」

綾野は中身の入ったコップを回しながら言った。
時々、中身がコップの外側を伝わってこぼれてくる。

「ま、そういう俺も５０を境に警察辞めちまったけどよ。
でも、俺は万年警部補だしな」
「上に行けば良いってもんでもないぜ」
「言ってくれるぜ。下に居るものにすればそんなこと、微塵も思えないがねガハハ」
「それよりもコバさん、景気のほうはどうだい？」
「まあ、ぼちぼちってところかな。
やっぱりこの業界はＴＶや小説で見るような華やかなもんじゃねぇ。
地味なのばっかりだよ、不倫調査とか企業偵察とか・・・」
「探偵も楽じゃないな」
「そう、今までの刑事の経験が生かせると思ったけどさ、どろどろしたのばっかりで嫌になるぜ。
そういえばさ、聞いてくれよ。
この間の依頼のことなんだけどよ、なんだと思う？

依頼人が美人なんでちょっぴり何か期待しちゃったんだけど、何とペットを探してくれって言うもんでさ、それで、それならばそれ専門のところへ行ってくれって言ったらよ、そこに断られたって言うんだよ。
そこで、いったい何を探すんだと聞いたら「猫の置物」とか言うんだぜ？
そこで俺としては・・・」
「世間話はその辺にして、俺の依頼を聞いてくれよ、コバさん」
綾野はきりがないと思い、コバさんこと小林の話を中断させた。
「おい、そうだったな。で、なんだ？」
小林は話を中断させられたことに怒る事もなく綾野に聞いた。
「あの、国民の支持を受けている霧山賢四郎議員のことを知りたい」
「あの現代の正義の味方と言われる霧山議員のことか？」
「ああ」
「なんでまた、あんな良い奴の事を知りたいんだ？」
「良い奴か悪い奴かは俺にはわからんがとにかく知りたい」
「お前さんの仕事の内容に関係あるのか？」
「まあな」
綾野の返事に対し、小林はビールを飲み干し、しばらく考えた。
途中、小林の奥さんが冷奴を持ってきた。
綾野はお礼を言い、それをつまんだ。
「条件がある」

小林は今までの表情とは打って変わって、真剣なまなざしで綾野を見た。

「なんだ」

綾野も空気を読み取ったのか、まっすぐな視線で聞き返した。

「霧山議員といえばお前も知っている通り、弱気物を地獄からすくってくれている救世主だ。

他の政治家にどんなにバッシングを受けようとも悪いことは悪いときちんと指摘も出来るし、良いことを即実行してくれる立派な人だ。

俺も彼のその行動を評価しているし、あの人がここの区で立候補したら票を入れる。

まあ、お前も仕事だから仕方がないとしてもそんな良い人間を調べるのは本人だけでなく国民に対しても失礼だ、わかるか？」

「言おうとしていることはね」

「そうか、わかってそう言っているのならば俺がなんと言っても彼のことを調べるつもりだな？」

「仕事だからな」

「そうか、まあ、お前が悪いわけではないし、俺もお前のことは嫌いじゃないからな、協力してやろう」

「ありがとう」

小林は綾野の意思を確かめるかのように言った。

綾野は冷奴に醤油を追加しながらお礼を言った。

「それでは、条件を言おう。

実はな、今、警察から探偵協会へとある依頼が来ていてな、協会からそこに所属する探偵事務所全部にその依頼が言い渡された」

「珍しいな」
「ああ、それでその内容が、最近起こっている銀行強盗のことなんだが、その強盗グループはとある人物に頼まれているらしいのだが、その人物がつかめないでいるんだ。
そこで、俺ら探偵に賞金つきでその人物を突き止めて欲しいということなんだが・・・」
「強盗は捕まっているのか？」
「ああ、捕まっていることは捕まっている。
しかし、皆口が堅くて、それでもってどういう訳かすぐに釈放されているんだ」
「変な話だな」
「だろう？だからよ、俺を含めて他の関係者はその「とある人物」の力ですぐに釈放されているんじゃないかって睨んでいるんだ」
「雇われ強盗の口の堅さを見ると、よほどのカリスマ性をもった人物だろうな」

綾野は冷奴を食べ終えて言った。

「で、その人物を俺に突き止めろって事か」
「そういうことだ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

今度は綾野が黙った。
箸で皿に残った鰹節と刻みネギをいじりながら「うーん」と唸った。
そして、その手が止まったとき、綾野は口を開いた。

「いいだろう、引き受けよう。
だが、あんたにもうひとつ教えてもらいたいことがある」
「何だ？」

小林は低い声で言った。
「那木貴也警部、いや、あんたのいた頃は警部補だったかな。若いキャリア刑事のことを知っていたら、どういう男か教えて欲しい」
「あの若者を知っているのか？」
小林は予想もしなかった質問に驚いたように聞き返した。
綾野は「ちょっと訳ありでね」と小声で言った。
「知っているも何も、一年あの男と同じ職場にいたからな。いい青年だよ。お前に良く似ている」
「どういう男だ？」
「どういうって、そりゃ、絵に書いたような好青年でよ、女の子にも良くモテるんでな、婦警さんの人気の的だった」
「それ以外には？」
「勘が鋭くてな。難解とされている事件をどんどん解決していってな。エリート以上の男だなありゃ」
「で？」
「まあ、俺の聞いた話によれば彼、なんか目的があって警察の道に入ったらしくてな。
俺にはこの世の悪を絶つんだって言ってたっけな。
まあ、俺の見たところ、もっと具体的な目的があるんだろうなと思ったけどな」
「例えば？」
「さあね、俺もそこまで知らねぇ。ただ、俺の勘では誰かを裁きたいんじゃないかな」
「ふうん」
「少しは参考になったか？」

「ああ」
「じゃあ、俺の条件のほうも頼むぜ。俺も一応調べてみるからよ」
「頼むよ」
そう言うと綾野は、コップに並々と注がれたビールを一気に飲み干した。

4、接触

「口を開かない銀行強盗、見えない雇い主」

電車の通る音とＰＣのキーを打ちながら、綾野は独り言を呟いていた。

「コバさんも汚ねぇよな、人の足元見てさ」

愚痴をこぼしながらキーを叩く手を休めてコーヒーを飲んだ。

「最近あまり計画的な銀行強盗は聞かないからなぁ」

ディスプレイには警察から来たＥメールが映っていた。

「しかし、コバさんの受けた依頼のものは恐らく計画的なものだろう。

ならば、的は絞れるはずなんだがなぁ」

綾野は警察から送られた過去の強盗に関する犯罪リストを見ていた。

しかし、そんな例の犯行はなかなか見つからなかった。

綾野はそんな動作にほどほど飽きてきたのか、関係のない事件をつまみ食いし始めた。

「恐らく、ここからでは見つからないかもな」

そう言い、綾野は見ていたリストを閉じて、新たに原因不明、未解決事件のリストを送ってもらうように、警視庁、警察庁にＥメー

ルを送った。
すると、まもなくそれは来た。
「多分、強盗なんてないと思うが、参考ぐらいにはなるだろう」
そう言って、再びリストに目を通した。
「こうやって見ると、日本にもよくわからない事件がいっぱいあるんだなぁ。
俺もアメリカで刑事やっていたときに、この国は変な事件がいっぱいあるなぁと思ったけど、わが祖国でもいろんなのがあるんだなぁ。
正直言って驚き」
独り言の増えるなか、綾野はふと、気になる事件を見つけた。
「都内公団住宅一家惨殺事件、か」
綾野は何かに引かれるようなものでもあるのか、そのリストを開いた。
「なになに、今から１０年前の出来事か」
画面にはその事件に関する詳しい内容がびっしりと表示されていた。
『公団に住む会社員を含む家族４人のうち3人が刃物及び銃器と思われる凶器によって殺害された。
第一容疑者として唯一無事であった長男が挙がったが、アリバイがあるため長男は該当せず。

ちなみに彼は高校生でサッカー部に所属していたのだが、その日はちょうど部活でサッカーの試合を行っており、他校交流試合が延長戦になったため、犯行時間には学校にいたと断定。
彼の部の部員、顧問教師、他校の生徒ですら長男の存在を目撃していたという証言の元である。
その他、あらゆる可能性から犯人を探したが、該当すつ人物は特定できず、そのまま迷宮入りしてしまう。
被害者の名前、田端二株式会社の営業部長、竹岡光夫（４６）、その妻で専業主婦の亜樹菜（４４）、長女の水鳥（２１）、長男琢哉（１６）。
現在、唯一の生き残りの琢哉は所在不明』

「なんか、どこかで似たようなものを見たような気がするなぁ」
綾野は髪の毛をくしゃくしゃにしながら言った。
そして、その手を途中で止めて、ディスプレイを睨んでそのまま動かなくなった。

「まあ、今までに似たような事件があってもおかしくないよな」
そう言うと、そのファイルを閉じて再び、強盗の検索をはじめた。
電車の音がカタンゴトンとしている。
そろそろ本格的に目がしぶしぶしだしてきた頃合いを見計らって、綾野はコンピューターのスイッチを消して着替えをはじめた。
「昨日は危うく勘付かれるところだったからな。今日はもっと慎重にやらなくては」

そう言いながらガスの栓を締めて、窓の鍵を確認した。
「昨日の見た感じと、コバさんの話から行くとかなり勘がいいと見える。
でも、俺はプロだ。そう簡単には見つからないぞ」
火の元やコンセントなどを確認すると電気を消して1階へ降りた。
綾野が本業をやるときは、店のほうはアルバイトに任せている。
今日もアルバイトが連絡を聞いて来ていた。
「それでは偵察へ言ってくるのでよろしく、バイト君」
綾野は彼にそう言うと、さっさと店を出て行った。
アルバイトはラジコンをやりに行くと思っているらしく
「くれぐれも壊さないように」
といい、綾野を見送った。

□■□

那木はとある町の喫茶店にいた。
コーヒーを飲みながら、誰かを待っていた。
「彼女とデートか？」
車の中で双眼鏡を片手に綾野は呟いていた。
その服装はなぜかスーツである。
そう言っている側から、那木が待っている人物らしき人がやってきて、那木の正面の席に腰掛けた。

それは、サラリーマン風の男であった。

「まさかあいつ、ゲイじゃないよなぁ？」

綾野はそう言うと、ダッシュボードの中から整髪料を取り出し、頭に満遍なくつけ、そして胸ポケットから櫛を取り出すと丁寧に髪の毛を梳かし始めた。

「昨日、姿を見られているからな。　軽く変装でもしておかないとな」

髪型をオールバックにして、付け髭を付けて、鼈甲色したフレームの眼鏡をつけて、片手にノートパソコンを持ち、車から降りてその喫茶店に入った。

綾野は那木から少し離れた所に席を取り、ノートパソコンを広げて、いかにも仕事中のサラリーマン風を演じながら、那木の話に耳を傾けた。

「例の資料、持ってきたか？」

「はい。那木さんのおっしゃる通り、霧山議員の資料を持ってきましたよ」

那木の待っていた男は、そう言うとおもむろに持っていたアタッシュケース開けた。

「しかし、あなたもなかなか嫌味な人ですね、　あの霧山議員のあら捜しに精を出すなんて」

「そんなことはどうでも良いだろう。それよりも、持ってきたものを出せよ」

那木は整った顔を少し歪ませてながら言った。

「良いですけど、約束のものを見せてください」

男はニヤニヤしながら言った。

那木は何も言わずに胸元のポケットから分厚い封筒を出し、その男に中身だけ見せた。

「はい、それではこれと交換しましょう」

男はそう言うと、分厚いか身の束を那木に手渡した。

那木はそれをぱらぱらと捲り、中を確認すると封筒を手渡した。

「じゃあ、用が済んだので私はさっさと退散しましょう」

そういうと、男はさっと席を立ち、店から去っていった。

「こんなところで情報売買をするなんて、俺みたいな奴だなぁ」

綾野は心の中で呟き、那木の様子を伺っていた。

付け髭が痒いのか、時々髭に手をやっている。

那木はそんな綾野に気づくことなく、貰った資料に目を通していた。

うんうんと頷きながらふと、目を休めるために資料から視線をはずした。

「・・・?!」

那木は視線をそのまま固定した。

その先には、ノートパソコンを操作しながらコーヒーを飲んでい

るサラリーマン風の男がいた。
口元に手をやりながらなにやらもごもご口を動かしているようだ。
「あの男、どこかで会ったような・・・」
那木は記憶の倉庫から必至に何かを探し出した。
しかし、探しているものはなかなか出て来なかった。
そうしていると、サラリーマン風の男は席を立ち、店を出た。
那木は何かに引かれるかのように、その後を付けるように店を出た。

綾野は笑みを浮かべていた。
そして、車には行かず、街中をすたすたと歩いていた。

「俺をつけるつもりだな。
本来ならばタクシーに乗って巻いてしまうところだが、ここは一つ、お手並み拝見と行きますかね」

そう呟くと突如、綾野は近くにあったビルに入った。
那木もすぐさま同じビルに入った。
普通の人ならば気づかないような、なかなか巧妙な尾行なのだが、綾野はすべてお見通しであった。

しかし、そのゲームも長くは続かなかった。
外から大きな声が聞こえてきた。

「強盗だ！！銀行強盗が！！」

その声に、那木は尾行の足を止め、振り返った。
そして、再び綾野を睨んだが、首を横に振ると外へ走り出した。

綾野はそのまま歩き、裏口から表へ出ると、急いで自分の車へ行った。

「真昼間から強盗か」

綾野はそう言いながら車のエンジンをかけ、ギアをいれてアクセルを踏んだ。

そして、そのまま銀行の方へ走り出した。

銀行では、見張りであろう、機関銃を持った男が二人、銃口をあちこちに向けながら立っていた。

警察の人間はまだ来ておらず、恐れを知らない野次馬共がその様子を見守っていた。

那木は警察の人間の中で一番早く現場についた。

しかし、彼は休暇中とあって、拳銃を持っておらず、仮に持っていてもかなわぬであろう、現状を見守っているしかなかった。

「現場にいるのに手出し出来ないとは」

那木は悔しそうに呟いた。

そして、何かを思いついたのか、野次馬の中で警備員はいないかと探した。

何人か見つけたが、皆、非協力的というか、冷静というか、自ら何とかしようとするものはいなかった。

那木はがっかりするも、わずかな現状を知ることが出来た。

どうやら、中には銀行を利用していた人間など、人質がいるらしい。

そのことを知った那木は、ただ、警察が来るのを待つしかなかっ

た。
それから待つこと十分、パトカーのサイレンの音が小さくながら聞こえてきた。
それはだんだん大きくなっていく。
しかし、それを待っていたかのように強盗たちは用を済まして銀行のすぐ横に停めてあった大型のバンに乗って走り出した。
那木はまずいと思い、すぐさま走り出すが、人間のスピードが車に追いつくことはまずない。
那木はそれをわかっていながらも、歯を食いしばりながら走りつづけた。
足がもつれそうになり、そろそろ心臓が限界まで達しようとしたところ、那木の横から一台の車が出てきた。

「乗れ」

車の中から男の声がした。
那木は考えるよりも先に車に乗った。
那木が乗り込むと同時に、先ほどの車を追い始めた。

「車に足で対抗するとは、何と無茶な奴だ」

運転席に乗っている男が呟く。
那木はその男を横目で見て、そして再び男の方に顔を向けた。

「あんた、喫茶店にいたな」

そう言うと、那木はシートベルトをした。
男は「そうか」と小声で言った。

「側で見ると、もう一つ思い出す。あんた、一昨日も俺のこと見

張っていたな」

那木は更に言った。

男は何も言わずににやりと笑った。

「ほら、その口の横に出来る皺、やっぱりそうだ」

「俺を詮索してどうする」

男、いや、綾野は言った。

「そうだな。そのことについては後でゆっくり聞くことにしてあんた、どうするつもりだ？」

那木は携帯電話を出しながら言った。

「電話は止せ。こっちにはこっちの事情があるんだ。

とにかく、しばらく追いかける。そして、頃合いを見て、奴らをひっ捕らえる」

綾野は口髭に指をやりながら言った。

その仕草を見て那木は

「あんた、その髭、取ったらどうだ？」

と、少し余裕が出来たのか、苦笑いを浮かべて言った。

「そうだな」

それに答えるかのように、綾野は付髭を取り、窓から捨てた。

カーチェイスは２０分ほど続いた。
猛スピードで綾野たちの乗る車を振り切ろうと信号無視、右折禁止のところを右折、追い越し、時には広い歩道を突っ走り、その速度は時速１５０ｋｍをすでに超えていた。
それだけでも驚きなのだが、更に驚きは綾野の運転テクニックである。
そんな無茶苦茶な運転をしている車を、的を外すことなく追いかけている。
この事実に那木はさすがに驚きを隠せなかった。
「あんた、Ｆ１レーサーかなんか？それだけの腕があれば、レーサーで十分やって行けるぜ？」
あまりのスピードに引きつった笑みを浮かべながら那木は言った。
「ありがとよ」
綾野は軽く流した。
「ところでおっさんよ、いつまでこうやってカーチェイスをしているつもりだ？」
軽く流されたのが気に入らなかったのか、那木はシートにしがみつきながら言った。
「そうだな、ちょっと様子を見ていたのだが、どうも奴らは俺らを巻くまでアジトには帰らないらしい。
ならば、こっちもそろそろ行動にでるか。
ところでお前、俺のこと今おっさんって言ったな？」

綾野はバンから目を離すことなく言い、そして胸元から片手で銃を取り出し、那木に渡した。

「おっさん、これ本物の銃だな。
どういう理由だか知らんが後で銃刀法違反で逮捕してやるぞ。
しかしな、俺あんたの名前知らないんだ。
あんたよりはおっさんの方が失礼ないだろう？」

那木は銃を手に取るとそう言った。

「俺の名前は今のところ言う必要もないだろう。
ところでお前、銃の扱い方は知っているな？」

綾野は横目で那木を見て言った。

「なるほど、その口振りからいくと俺の職業を知っているのか？
ああ、一応使えるよ。警察の訓練で鍛えている。
ところでこいつでどうするつもりだよ？
映画みたいにタイヤにぶち込んで相手の動きを封じるか？」
「馬鹿言え。タイヤをパンクさせるなんてよほど運が良くなければ無理な話だ。
いいか、よく聞け。
これからあのバンの横に並ぶ。
そしたらバンの側面の下を狙って何発か撃ち込め。
そして、この車が完全にバンを抜いたら俺の後ろの席に移動しろ。
死にたくなければ確実にやるんだ」

綾野は真剣なまなざしで言った。
那木もそれを察したのか、シートベルトを外し、窓を開けた。

「それじゃぁ、行くぞ！」

綾野はアクセルを思い切り踏み込んだ。

綾野たちを乗せた車は信じられないスピードでぐんぐんバンに近づいていった。

その状況に回りの車や歩行者は、距離を置いてその災難が通り過ぎるのを待っていた。

反対車線から車が来ていないことを確認すると、綾野はハンドルを右に少し切った。

那木は、自分の手が湿っているのがわかった。

那木の視線にバンの側面が入ってきた、と同時にバンの中から強盗が銃を構えている姿を見た。

「おい！向こうも銃をこっちに向けているぞ！？」

那木は綾野に言った。

「馬鹿野郎！何ビビってんだ！！早く撃て！！！」

綾野はそんなことを気にすることなく罵声を上げた。

その勢いに押されて、那木は恐怖を感じる前に綾野に言われた通り、側面の下を撃った。

「後ろに移動しろ！！」

綾野は大声で叫んだ。

その声を合図に那木は慌てて綾野の後ろへ移動した、と同時に綾野はハンドルを思いっきり左に大きく切った。

タイヤの悲鳴とともに綾野たちの車はバンの行く手を塞いだ。
強盗たちも突然の障害物に思いっきりブレーキをかけた。
なんとかぎりぎりのところでバンは止まり、ギアの擦れる音を立てた。
那木はその音を聞き逃さなかった。
開きっぱなしの窓から外に出て、バンの中に銃口を向けて

「動くな」

そう言い、強盗の動きを制した。
綾野はそれを確認すると、のんびりと車から出てきた。
そして、那木の隣に並び、強盗の顔を丁寧に見た。
合計5人いるようだ。

「強盗及び交通法違反その他もろもろお前らを逮捕する」

那木はそう言い放った。
しかし、強盗らはにやにやしているだけであった。

「俺らを捕まえても無駄だ兄ちゃん」

強盗の一人が言った。

「お前らの雇い主が警察に顔の聞く奴で、釈放してくれるんだもんなぁ」

那木の横から綾野が言った。
那木と強盗はいっせいに綾野のほうを見た。

「どうやらそちらさんの方が事情に詳しいらしいな」

強盗のリーダーらしき男が言った。
「ならば話は早い。どうせ捕まえても無駄なんだから俺達を見逃してくれよ。
もちろん、ただとは言わないぜ」
那木は顔をゆがめた。
「ふざけるな！誰が取引なんかするものか！！
それに、お前等はこの俺が釈放させん！」
そんな那木の言葉にリーダーと思われる男はケタケタと笑い出した。
「兄ちゃん、どうやら頭があまりよくないらしいな。
おっさんよぉ、その兄ちゃんに言ってやってくれよ」
綾野を見て男は言った。
綾野は頭を掻きながら、那木の方は見ず、言った。
「確かに、お前らに警察の力は及ばない。
だが、俺はお前らに用があるんだ。率直に言うとお前らの雇い主を知りたい。
だから、俺に少し付き合ってもらうぜ」
那木は綾野の方をちらっと見た。
そして、どういう事だと小声で聞いた。
綾野は、そういう事だ、と軽く受け流した。

「かといってなぁ、5人も要らないんだ。
・・・・・・そうだな、お前、お前一人で用が足りる」

綾野はそう言いながら、リーダーと思われる男の腕をつかんで、グループから引き離した。
そして、男の手首と足首に手錠らしきものかけ、手足にかけたものを今度は一本の鎖で結び付け、そのまま、自分が乗ってきた車の後部座席に乗せた。
そして、男から、身に付けていた銃を取り上げ、那木の持っている銃と交換した。

「ま、そういう事だよ。
あれだけ騒ぎが大きければお前の仲間もすぐに駆けつけてくる。
それまでしっかりそいつらを見張っていろよ。
俺はこいつを連れてさっさとこの場を去るからな」

そう言うと綾野は運転席に乗り込み、エンジンをかけた。

「そうそう、仲間が来たらこういっとけよ。
“俺がそいつらから銃を何とか奪い、こうして動きを制した。
しかし、残念なことに一人取り逃がしてしまった。
しかし、他のメンバーはこうして捕らえたので後はよろしく”ってな」

綾野は窓の開いた助手席の向こうから叫んだ。

「嘘をつくと後で厄介なんだが？」

と、那木も大声で言った。

「じゃあ、逃がせ。
どうせ逮捕してもすぐに釈放されるんだ。
全員逃がしてしまいましたとでも言っておけ」

最後にそう吐き捨て、綾野はその場を去っていった。

「名も告げず、こんだけ騒ぎを大きくしておいて、自分の用だけ済ませてドロンか？
俺は一体どうなるんだ？」

那木は銃を構えたまましばらく考えた。
もしも、警察の奴らが来たらいろいろと聞かれる。
あれだけのカーチェイスを繰り広げておいて、あのおっさんの言うような嘘を言ったら絶対に信用されない。
そもそも俺は休暇中だ。
休暇といってもただの休暇ではない、謹慎を含めている休暇なのにこんなでしゃばった真似をしたら俺の今後が困る。
となると、何が一番ベターか・・・・・・・・・・・・・・・
那木はしばらくして、一つの結論に達した。

「お前ら、逃げろ」

那木は持っていった銃から弾を抜き、彼らに手渡すとそう言った。
強盗たちは那木の突然の気変わりに戸惑った。
しかし、那木が「さっさと行け」と怒鳴るとそれに従うように穴のあいたバンに乗り、そのまま逃げていった。
そのバンが完全に消えた頃、警察の人間が来た。
警官はどうやら那木の顔を知っているらしく、すぐさま事情を聞き出した。

「協力者がいてな、強盗を止めてくれたのはいいが、向こうが銃を持っていてな。
そのまま逃げられたよ」
那木はパトカーによしかかりながら言った。
「目撃者と言っている事とは違いますが？」
「遠くから見ているんだ。詳しいことまでは分からんだろう。いろいろと複雑だったから、いろんな見え方がしたのだろう」
那木はそう言うと「後は警察署で話すよ」と言って、その場を去った。
「どう言い訳をしようか」
そう考えながら那木は顔をゆがめるのであった。

□■□

そこは、潮の香りがした。
「ボー」と汽笛の音が聞こえる。
古びた蛍光灯がチカチカと部屋の中を照らす。
蛍光灯の縁が少し黒ずんでいる。
カバーがないため、全体的にすすけた感じだ。
男は椅子に手足の自由を奪われていた。
その男の前にはもう一人、男が立っていた。
「リリリリリリリリリ」
男二人と何かが入った袋以外、何もない部屋に、ベルの音が響い

た。

「俺だ」

立っている男は電話を取り出し、こう答えた。

電話からは女の声が聞こえる。

座っている男には内容までは聞き取れないが、それだけは分かった。

『久しぶりね、綾野さん。私だけどわかる？』

立っている男、綾野にはこう聞こえている。

「ああ、それでどうした」

座っている男に構わず綾野は言った。

『実はたった今、面白い車が私の店にやってきたんだけど、知りたい？』

「もしかして、右サイドの下のほうに銃弾か何かが打ち込まれたバンか？」

『ええ、ご名答。

どうもその銃弾の跡が、あなたの使っている銃で撃ったものによく似ているからと思って一応連絡してみたんだけど、やっぱりそうみたいね』

「で、修理の依頼主は誰か分かるか？」

『どこかのチンピラみたいね。

修理にいくら出せるのと聞いたら望む通りと言ったから、どうしたと思う？』

「さぁ」

『今日、ニュースで銀行強盗の速報やってたでしょう？
それで、被害総額が2億って言ってたのよ。
だから、その稼ぎ全部って言ったの。
そしたら払えないって。
だったら他を当たってみたらって言ったの。
でも、相手もそれほど馬鹿じゃないのね。
あんな銃弾の穴があいた車の修理や処分、一般の自動車整備やなんて嫌がるものね。
だから彼ら、誰かに電話したみたい』
「金の工面をしてくれる奴にか？」
『そうかもしれないけど、私も詳しいことは分からないわ。
でもね、その電話の内容を立ち聞きしちゃったんだけど、ちょっとビックリすることを聞いちゃったのよ』
「何だ？」

綾野は座っている男の事を観察しながら言った。
男は余裕か、愛想笑いを浮かべていた。
綾野も電話を聞きながら笑い返した。
電話からは女の甲高い声とともに、興味をそそられるような事実が綾野の脳を刺激した。

「そうか、ありがとう。十分参考になった。
お前の方もそうなるとかなり危険だ。
分かっているとは思うがいつものように、ほとぼり冷めるまで俺の別荘で遊んでな、良いな？」

そう言うと、綾野は電話を切った。

「本当はお前から聞こうと思ったことが意外な形で分かってしまった」

「となると、俺にはもう用がないって事か？」
男は苦笑いを浮かべて言った。
「俺を殺すかい？」
「まさか」
綾野の軽い声が何もない部屋に響いた。
「俺は殺しとか暴力とかは嫌いなんだ。だから、そんな野蛮なことをする気はない」
「じゃあ、俺を解放するか？」
「まさか。俺はそこまで馬鹿じゃない。
だけど、俺って結構慈悲深い男なんだ。
それに、相手が誰であれ、実力があれば認める。
だから、お前にチャンスをやろう」
綾野はそう言うと、胸ポケットから銃とナイフを出し、銃を男に向けながらナイフで男の自由を奪っていたロープを切った。
「今から、お前のお頭のテストを行う。
条件はそのロープと木で出来た椅子、そして・・・この携帯電話、そこにある3日分の食料と毛布だ。
これらのものを使って無事、このコンテナの中から出れたらお前は自由だ。
俺はお前を追ったりはしない。
しかし、脱出が無理な場合、もう限界な場合、この携帯の裏に書いてある番号に電話すれば、俺がお前を救出しに来てやる。
ただし、その時はお前の自由は俺が束縛し、そして、お前の雇い主をしょっ引く際、証言してもらおう。

どうだ、悪くないだろう？」
「嫌だと言ったら？」
「チャンスはないだろうな」
男の質問に、選択の余地はないといわんばかりに綾野は答えた。
「ハン、要するに半ば強制的って事か。
仕方ねえ、受けて立ってやるぜ」
綾野の言葉の意味を理解してか、男は条件を承諾した。
「しかし、本当にそんな条件で良いのか？」
男は自信有り気に言った。
「ああ、それじゃあ俺はさっさとここから退散するよ。
結構忙しい身でね。せいぜいがんばれよ」
綾野はそう言うとコンテナから出て行った。
表から鍵のかかる音が聞こえると、男はすぐに携帯電話を手にした。
「馬鹿な奴だ。目隠しもしないでここに連れて来て、携帯を残すなんて・・・」
と言ったとたん、突然コンテナが揺れた。
「何だ？！」
男がそう言おうと口を動かしたとき

「そうそう、言い忘れたことがあった」

と、外から綾野の叫ぶ声が聞こえた。

「このコンテナは俺の友人に頼んで、ランダムな時間に移動してもらうことにしてるんだ。

その度に揺れるが勘弁してくれ。

それと、携帯電話の電池はその中に入っているものしかないんだから、大事に使えよ」

「何だとぉ？！」

男がそう叫ぶとコンテナは小刻みに動き出したのであった。

□■□

夜中の一時ごろ、街頭の光を浴び、薄く光を反射している陸橋の上に人の影が二つ、ぼんやりとあった。

その下を通る車もほとんどなく、遠くから聞こえる何かの音が静かに響いていた。

「お前に依頼されていた霧山議員の調査の件、一応出来たぞ」

小林は遠くを見ながら言った。

「調べてみると、結構空白のところがあったりしてな、俺が分かるのはそこまでだよ」

小林はそう言うと、綾野の手に握られた紙の束を見た。

「いや、これだけ分かれば上等だよ、コバさん」

綾野は優しい笑みを浮かべて言った。

「ところでお前、前に那木君の事について何か言ってただろう？霧山議員がそんなものだから申し訳ないと思って、一応穴埋めと言うか、彼の過去も色々調べてみたんだが、聞くか？」

小林は低い声で言った。

綾野は小声で「教えてくれるのであれば」と言った。

小林は一つため息を吐いた。

「俺も警察に入ってくる奴だから、それほど彼の過去は気にしなかったんだが、調べてみるとそれが意外、あるところから白紙なんだよ」

「へえ」

「那木君は過去に交通事故で家族を亡くしているんだが、彼の詳しい経歴を調べようとすると、彼の大学生以前の記録があまりに曖昧というか、詳しくないんだよ。

それでな、彼の大学時代の友人達にに彼のことをいろいろ聞いてみたんだ。

交友関係は広かったらしいんだが、親友と言うような人物は一人もいない。

でな、その友人に彼がどういう人物か聞いてみたんだ。

まあ、性格は俺も知っている通り好青年そのものなんだが、それ以外である共通点に気づいた」

「共通点？」

「ああ。皆このことに関する事を質問すると同じような反応を示すんだが・・・

大学以前のことを皆知らないと言うんだ。
だって、変だろう？
普通はさ、高校時代どんな部活をやっていたとか中学校はどこどこだとか、少なからずなんか知っていてもいいはずだ。
しかし、誰も彼の過去を知らないんだよ。
彼がどこで、何をしていたかって言うのは」
「つまり、那木は偽装の過去で警察に入ったと？」
「それもそうなんだが、そんなこと普通一般的に無理なことだ。
となると、どういうことになるか・・・」
「警察は、それを受け入れなければならない事情を彼に対して持っている」
「でなければよっぽど上手い偽装だろうな。だが、どう考えてもそれは違うと思う」
「断定できる根拠でもあるのか？」

綾野は厳しい顔をして小林の顔を見た。

「大学で、彼に対して妙な噂が立ってたんだよ」
「噂？」
「ああ、すぐに消えてしまった噂らしいんだが、とても奇妙な噂でな、彼、改名しているんじゃないかって言うんだ」
「改名？」
「そう、大学は言って間もなくのこと、ちょっとした催眠セミナーに参加したときのことらしいんだが、奴、催眠術の実験に志願したらしい。
で、そのときに奇妙なことを言い出したんだ」
「へえ」
「催眠術でよく、あるキーワードを言えなくするするのがあるだろう。
その時は自分の本名を言えなくするようにしておいたらしいんだ

が、なぜか彼はすんなり本名を言ったらしい」
「催眠術にかかっていなかったんじゃないのか？」
「普通そう考えるよな。だけどそうでもないらしいんだ。
他のキーワードを言えなくして同じ事をすると、ちゃんといえなくなるんだ」
「まだ、その時はかかりが浅かったとか？」
「他の奴もそう思って何度か実験した後にもう一度同じ事をした。
しかし、彼の反応ははじめと同じ、本名をすんなり言ったと言うことだ」
「つまり、本名ではないと？
しかし、名前と言うのはそう簡単に忘れんものだろう。
まあ、俺自身あまり催眠術のことは知らんが」
「それが、念のためと思って、役所などに行って調べてみた。
現役時代にちょっとしたきっかけで役所の重役と仲良くなって、彼に内密に調べてもらった」
「それで」
「やはり、改名していたんだよ」
「竹岡琢哉」
「？！なんで知っているんだ？！」
「銀行強盗の件で色々と調べていたらね。
なんとなく気になた事件で記憶しておいたんだが、コバさんの話を聞いて、もしかしたらって思ったんだ」
「そういうことか、なら話は早い。
竹岡琢哉といったらあの、警察未解決の殺人事件の被害者だ。
恐らく警察もそれを考慮してか、彼の審査を少し甘くして警察に入れたのだろう。
しかしなぁ、あの青年にそんな過去があろうとはな、今でも辛いに違いない」
「そうだな」

綾野は呟いた。
「お前にも少しは分かるだろうな。いっぺんに家族を失う気持ちが」
「ああ」
綾野は天を仰いだ。
遠い過去の記憶、今、それが彼の脳裏を過ぎた。
深く思い出そうとすると胸が締め付けられるように痛くなる。
綾野は思い出すのをやめた。
「まあ、俺のことはどうでも良いだろう。
それよりもどうしてあの青年は警察になんかなった？
警察もどうして偽装の経歴を持つ人間をすんなりいれた？」
「そのことなんだがな、警察が彼にそういう経歴にするように指示したらしい」
「警察がねぇ・・・なるほど」
綾野は見えない遠くを見ながら呟いた。
「ところでどうしてお前、那木君のことに興味あるんだ？」
小林は素朴な疑問を投げかけた。
綾野は小林の顔を見た。
そして、口をしっかり閉じ、しばらくして口を開いた。
「それは、とある依頼人と俺の秘密なんだ。
あんたも探偵ならば依頼人の依頼を、人に必要以上しゃべらないだろう？」

そう言い、遠くを見た。

「あくまでも俺には内緒か。まあ、いつもの事だ。これ以上聞くのはやめよう。ところで、銀行強盗の件だが・・・」

小林は綾野のほうに体を向けて言った。
綾野は頭をポリポリと掻いた。
そして、目を細めて言った。

「その件に関してはまだ調査中だ。進行状況を話せるほど分かっていない。分かり次第、連絡するよ」
「わかった、よろしく頼む」

小林は、本当のことは言っていないなと思いつつ、こういう時は叩いても何も出てこない事を知っているのか、そのまま素直に受けた。
小林がそろそろ帰ろうとした時、綾野は小林を呼び止めた。

「今日、那木と銀行強盗を捕らえたよ」

綾野の表情は心なしか柔らかい。

「でも、警察は逃がしたと言ってたぞ?」

小林は苦虫をつぶしたような顔をして言った。

「今日、彼と初めて仕事をした。はじめは足で車に追いつこうなどとしていたのでどうなかと思っ

たんだが、実際一緒にに行動をして、なかなか見込みのある男だと思ったよ」

そう話綾野の顔は楽しそうだ。

「良かったな。で、なんだ？」

小林は綾野の楽しそうな空気に誘われて、苦笑いを浮かべた。

「いいな、彼。

勘がいいし、何よりもまっすぐな瞳がいい。それに若い。

羨ましいなぁ。俺がもし彼と似たような年齢なら友達になりたい。

そういう魅力を持っているよ、彼は」

「ならば、今からでも友達にでもなればいいだろう」

小林は息子に話すように言った。

「機会があれば是非」

綾野はそう言った。

「じゃあ、もう遅いから俺は帰るぞ」

小林はそう言い残し、帰っていった。

相変わらず変わった奴だ、そう思いながら家路を急いだ。

綾野は小林の姿が見えなくなるまで彼の背中を見ていた。

「もしも、あの青年と仕事が出来るなら・・・

・・・もっとすごいことができるよ」

小林の気配が完全になくなったにも関わらず、ずっと視線を逸らさずに、そう呟いた。

□■□

翌日、那木は公園で朝食を摂っていた。
警察の独身寮では男ばかりで食事もおいしくないし、何より彼は謹慎休暇中なのでそこにいなくてはならない理由もないので、コンビニでパンと牛乳を買って公園のベンチでのんびり食事をしていた。
公園では母親と子供が楽しそうに遊んでいた。
那木はその光景を、目を細めて見ていた。

「家族・・・か」

そう言い、パンをかじった。
そう言えば自分にも遠い昔、家族がいた。
狭い部屋に家族４人、マイホームではないけどそれなりに幸せな生活を送っていた。
自分がいけない事をすれば、母親が、父親が自分を叱り付けて、でも、良いことをすれば自分のことのように喜んだ。
姉とは年が５つ離れていたがなぜか良く姉弟喧嘩をしたもんだ。
でも、それ以外のときはよく連れてられ、姉の友人達にくしゃくしゃにされたもんだ。

あの事件が起こるまでは。

悲劇の日、遠い、決して忘れることのない忌まわしい事件。
あの出来事がなければ家族はいつものように自分に「おかえり」と言ってくれるはずだった。
しかし、その日は違った。

なぜ？どうして？
自分の家族が何をした？！
自分が一体何をしたというんだ。
誰かに迷惑をかけたか？　誰かを傷つけたか？
どうして、どうして自分の家族があんなことに、なんな無残な姿に？！
そして、どうして自分だけ生き残った・・・・・・・・

牛乳パックを持つ那木の手に自然と力が入る。
しかし、那木はそれに気づかなかった。

あの日以来、自分は大事なものを奪った奴を探す決意をした。
あの事件で分かったのだが、警察は証拠がなければ何もしてくれない、いまだに犯人を逮捕できていない、大事なものを奪った奴は今でものうのうと生活をしているんだ・・・
そう思うとじっとしていられなかった。
自分は自分なりにいろいろ調べた。
もっと調べるために警察に入った。
そして、もっと奥まで知り、ついに家族を奪った犯人を突き止めた。

那木はいつのまにか思いっきり歯を食いしばっていた。

しかし、世の中と言うのはこんなに汚いものだと、自分は嫌と言うほど知らされた。
犯人を訴えようと自分なりに集めた証拠が警察に預けるたびになくなる。
自分で持っていると怪しまれるのでどうしても警察に預ける。
しかしなくなる。
俺の家族を殺した凶器も見つけた。

しかし、警察はまたなくす。
あまりに紛失するので、その原因を調べた。
すると、恐るべき裏の世界の仕組みが分かった。
なんと、警察自身が犯人のために故意に証拠を消しているのであった。
なんと言うことだ。
信用できるはずの警察がこんなことをしているなんて・・・
話によれば犯行当時にも証拠はあった。
しかし、警察の中の何者かが自分の懐を暖めるために証拠を闇の市場に売ったということだ。

「どうなってやがるんだ・・・この世の中」

那木はベンチの背もたれによしかかり、呟いた。
犯人はわかった。
どこにいるかも知っている。
しかし、自分にはどうしようも出来ない。
悔しい、とても悔しい。
過去を清算するために名前も変えた。
なのに、あいつを裁けない。
那木は目を固く閉じた。
そして、自分の無力さに歯がゆさを感じた。
ふと、那木は何か気配を感じ、目を開けた。

「いい若いモンがこんなところで飯食ってるなんてジジイみたいだぞ？」

那木の隣に彼は座っていた。
声といい、顔といい、笑いじわをみてこの男が誰かすぐに分かった。

「どうやらおっさん、俺のことをずっと監視しているみたいだが、何なんだ？」

那木は隣に座っている綾野を見て、そう言った。
綾野はそれに答える前に、視線で手を見るように促した。
牛乳を持っている手が濡れていた。
那木は慌ててハンカチを取り出し、それを拭き取った。

「結局あいつらを逃がしたんだな」

綾野は那木のほうを見ずに言った。

「後の処理が厄介だと思ったんでね。
それとも刑事としては情けない奴だなとでも言いたいのか？」

那木は自分の視線を無視する綾野をじっと見つめて言った。
綾野は背もたれに深くよしかかり、足を組んだ。
そして、両腕を頭の後ろに持っていき、一つあくびをした。

「確かに、警察の人間としては失格だな。
だが、別に悪くはないさ。どうせ捕まえても釈放されるしな。
それに、俺としてはそうしてくれると思っていたんでね。
お陰で仕事がはかどったよ」

綾野は涙目で那木を見てそう言った。
今度は那木が顔を背けた。

「おっさん、何者だよ？それに仕事ってなんだ？
なんで俺を監視している？」

綾野はしばらくそのままの体制でいた。
そして、今度は伸びをして、手を膝の上に置いた。
「なあ、お前。俺と一緒に仕事をする気はないか？」
真剣なまなざしで綾野は言った。
那木は突然の言葉に一瞬言葉を失った。
綾野はそんな那木をじっと見ていた。
「何の仕事だかも教えないでそう言うのか？
しかも、どんな理由だか知らんが俺を監視している奴の言うことなんか聞いてやるもんか」
那木はそう吐き捨てるとベンチを立ち、そこから去ろうとした。
そんな彼を見て、綾野はにやりと笑った。
「いいか、那木。
今のお前ではあの偽善者を裁くことは出来んぞ。
どう足掻いても、時間をかけようとも無理なものは無理だ」
那木は綾野の言葉に振り向いた。
「だが、俺にはできる。俺にはその力がある。
どうだい、ここは一つ、俺に協力する気はないかね・・・竹岡琢哉君？」
那木はしばらく綾野を見、そして何も言わずに去っていった。
「一度、痛い目に遭わないと分からん奴だな」

綾野は那木の後姿をじっと見つめていた。

5、不条理な制裁

那木は不快な気分で独身寮に戻った。
すると、仲間が顔色を変えて那木に話し掛けてきた。

「おいお前、どこほっつき歩いていたんだよ！
お前が出かけている間に大変なことになったぞ！」
「どうしたんだ？」
「どうもこうもお前、前から霧山議員のことについて調べまわっていただろうに。
霧山議員がお前に警察辞めろって言ってきてな。
もしも辞めなければ警察全体を訴えるって・・・」
「どうしてそんな勝手なことができる？」
「勝手も何も、今委員会で会議中だ」

那木は驚きよりも先に怒りを感じた。

「なんで調べて悪い？理由はきちんとあるぞ？」
「強行犯係の奴が知能犯係の調べるようなことをやっていることがか？」
「だが、その理由を話しても奴らは何もしてくれない」
「とにかく、お前のやっていることは越権行為には違いないだろう。
まあ、今はな、会議でどう結論が出るかを待つしかない」

同僚はそう言うと自分の部屋に入って行った。
那木はただ、そこに立っているだけであった。

□■□

綾野は車の中でなにやら新聞を見ていた。
車はどこかのドライブインの駐車場にあった。
「都内竹岡一家殺人、襲撃事件」
古い新聞を見ながら綾野はそう呟いた。
「マスコミの奴らは警察はいくつか証拠をつかんだと書いてあるな」
綾野は持っていた新聞を助手席に投げると、携帯電話を取り出し、どこかへかけた。
「ああ、もしもし。俺、綾野だ」
受話器のマイクから声が漏れる。
『ああ、綾野かい？昨日は夜遅くに電話してきた件だけど』
「何かでてきたか？」
『おう。霧山議員だかなんだかのことだろう？
政治家のことで俺の知らないことはないぜ』
「で、何がでた？」
『なーんだか姿に似合わないモンがいっぱい出てきた。
やっぱり、あの銀行強盗の件、強盗雇っているのはあの狸だ、違いねぇ』
「他には？」
『いやぁ、信じられないなぁ。
弱き者を助け、強き悪を挫く、俺もかっこいいと思っていたんだが、あんたに調べろって言われてがっかりしたよ。

なんと援助金その他が、その銀行強盗によって得られた金だったんだもんなぁ、わからんもんだよ。
どうせ良いことになんか使われない金なんだし、同じ使うなら良いことに使おうとする精神はわからんでもないけど、でも、犯罪は犯罪だもんなぁ』
「ああ、その通りだ。それで、他には何もないのか？」
『いやぁ、それがよ、調べてびっくり、叩いてみるとなんととんでもない埃が出てきたもんだからもう！！
なんとあの狸、殺人もしでかしているんだな。
しかも、自分では手を汚さずに、殺し屋を雇ってやってるもんだ』
「そんな殺人だ？」
『そんなこんなも未解決の事件だよ。
あの、竹岡一家事件。残されたあんちゃんが不憫だよ』
「で、どうやってもみ消したか知ってるか？」
綾野は思っていた通りの展開に少々興奮気味だ。
『そりゃ、当時から政治家だった狸は金に物を言わせて、サツの上層の一人を買収して証拠隠滅だよ』
「そうか。じゃあ、証拠はもうこの世に存在しないってことか？」
『いや、それがそうでもないみたいなんだよ』
「どういうことだ？」
『その、買収されたお偉いさんの行為を見つけた部下がいてな。そいつがいい奴だと思ったら大間違いで、事件の証拠をこっそりくすねてねな、なかなか賢い奴だよ。
ゆするなんで危険なことをしないで、ある商売人に売った』
「売った？」
『ああ、あんた知らないのか？
何でも賢い奴がいてな、ある筋から警察の見逃した証拠を集め、それをいろんなところで売るんだ。

結構儲かるらしいぜ』
「変な商売もあるもんだ。
で、そいつは今でも証拠を持っているとでも言いたいのか？
もう１０年も経っているというのに」
『それがそうなんだよ。
なんでもその証拠、売れ残ってしまったらしくてな。
でも、証拠って未解決のもんって結構長く取っておいても商売になるんで置いてあるって聞いたぜ？
その代わり、ワインみたいに年を重ねると値段も重なるって言ってたけどな』
「１０年もののワインってやっぱり高いのか？」
『それなりにね』
「なるほど、十分参考になった。
そこで、そのワインを売っているところを教えて欲しいのだが・・・」

綾野はそう言うと、メモ帳にその場所を書いた。
そして、礼を言うと電話を切った。

綾野は用意していた缶ジュースを開けて飲み出した。
そうしていると、車の窓ガラスを叩く音が聞こえた。
そちらを見ると、小林の顔が見えた。
綾野は窓を開けた。

「待たせたな。ちょっと急用が出来てな。遅くなった」
「別に構わんよ」

綾野はそう言うと、新聞紙を後ろの席に投げ、助手席のロックを外した。
そして、小林が車の中に入ってきた。

「で、話って何だ？」

小林は胸ポケットから煙草を出した。

「実はな、銀行強盗の雇い主が分かったんでな。それを伝えたくて」

「ならば電話でも良かろう」

小林は煙草に火をつけた。

「電話で話すにはちょっと複雑でね。こうやってわざわざ来てもらった」

綾野は開いていた窓を閉めた。

「複雑？どういうことか説明してもらえるんだろうな」

「ああ、取り敢えず、結論から言うと雇い主は“霧山賢四郎”だ」

「なんだと？！」

小林は口から煙草を落としそうになった。

慌てて煙草をくわえ直すと今度は口から煙草を取り、ふうと煙を出した。

「じゃあ、詳しいことを話そう。

ある、政治家事情に詳しい友人の話によると、霧山は盗んだ金で弱きものを援助したり、施設を建てたりしているらしい。

どうしてそういう事をするかは、本人ではないので分からない。

しかし、間もなく証言者が得られると思う。

それで通常は強盗の主犯の容疑者で奴をしょっ引けるだろう。

しかし、霧山の犯している犯罪はこれだけじゃないんだ。
過去に大きな犯罪を犯していて、もみ消している。
だから、仮に今奴を警察に突き出しても無駄だろう」
綾野は手のひらで空気をぱたぱたさせながら言った。
小林はすまんと言って窓を開けて煙を出した。

「まさか、あの霧山が強盗の主犯だったとは・・・
しかし、それよりも気になるのは過去に犯している犯罪だ。
なんだ、その犯罪って？」
「殺人」
「・・・何だって？」

小林は自分の耳を疑った。

「直接は手を下してはいない。ただ、殺し屋を雇って殺した」

綾野はハンドルに寄りかかりながら言った。

「で、被害者は誰だ？その事件とはいつの話だ？」

小林は身を乗り出して聞いてきた。
煙草の臭いが綾野の鼻を突いた。

「１０年前の竹岡事件だよ」
「？！」
「なぜ霧山は竹岡を殺したのか分からないがな」

小林は言葉を失った。
ちょうど綾野の車の隣に他の車が止まった。

中に乗っているカップルが不信そうにこちらを見た。
「そうか、それで那木君は霧山を裁きたいがために警察に入り、いろいろと調べていたんだな」
「あんたが辞める前も調べ物をしていたのか？」
「ああ、あれ？言わなかったっけ？」
「聞いてないが」
「すまんすまん。ま、そういうことだ」
小林は携帯用灰皿を出し、煙草の火を消した。
「で、俺にどうしろと言うんだ」
綾野は小林の言葉に、視線を固めた。
何もない宙をじっと、瞬きもせずに見ていた。
「取り敢えず、この件からは手を引いてもらいたい」
小林の方に向き直り、綾野は言った。
「ん、そういう事ならやむを得んな。
どうせ、警察に突き出したところで俺にはプラスにならん。
手を引こう」
小林は素直に応じた。
「なあ、綾野。
今更こういうのもなんだが、俺に協力できることがあれば・・・」
小林がそう言ったとたん、携帯電話のベルの音がその空間を走っ

た。

「ちょっとすまん」

綾野はそう言うと、胸ポケットから電話を出し、応対した。

「もしもし、はい。俺だが・・・」

そう言うと、綾野はにやりと笑った。

「そうか、わかった。今から行く。

何か食いたいものはないか？なんだったら持っていくぞ？

・・・・・・そうか、じゃあ今から」

そう言って、綾野は電話を切った。

「悪いがコバさん、ちょっと用事が出来た。

・・・そう、協力できそうなことは申し訳ないがないよ。

それよりも、情報提供ありがとう。十分助かった。じゃあ」

綾野の言葉に小林は軽く頷いき、車から降りた。

綾野はそれを確認すると車を出した。

小林は黙って見送っていた。

□■□

「どう言う事か、もう一度説明してくれるかな？那木警部」

ここは警視庁の会議室。

普段、一般人の見ることのない、警察の上層部の偉い人物がいっ

せいに那木を見ていた。

「だから言ってるじゃないですか。

霧山賢四郎議員の資金の出所がいまいち不信なので調べていたんです。

もちろん、知能係の人にも依頼をしてみました。

でも、自分で本来の仕事に差し支えない程度に調べていたんです」

「その根拠は？」

「それはどうしてあの政治家があんなにたくさんの金を持っているのか、施設を建てる使用はどこから来ているのか、援助金はどうやって稼いでいるのか。

計算してみましたが、霧山議員の収入のみでは不可能なんです」

「法人団体から支援を受けているんだろう」

「その件についても調べてみました。

だけど、そのことを証明する事実がどこにもないのです。

となると、どうやって資金を得ているのか、調べる必要があると思います」

那木は怯むことなく言った。

「・・・ま、まあ、その件に関してはその道のプロに我々から言っておこう。

それよりだ、君はそれを隠れ蓑に、霧山議員が殺人をしたのではないかという、事実無根の件について調べているということじゃないか。

勝手に犯人を作ろうなどとは違法だぞ？」

上層部の一員は、那木の正論を濁し、話を違うほうへ持っていった。

「その件に関しましては、事実無根ではありません。
ただ、今、その理由を証明するために調査中です」
まっすぐな瞳で那木は言い切った。
「調査中？それでは困るなぁ。
今その理由を知りたい。
もちろん、そのことを裏付ける証拠とともにね」
上層部の一人が鬼の首を取ったかのように言った。
しかし、那木は引くことをしなかった。
「お言葉ですが警視殿、自分は今まで、霧山議員の殺人に関わったことを証明できる証拠を探し出し、何度となく提出しました。
しかし、どういう訳か、皆紛失してしまうようで、ここに提出できるものはありません。
念のため、証拠提出の際の書類を持って参りました。
この通り、上司から認定の印を貰い受けました」
そう言うと那木は、その書類を彼らに提出した。
しかし、彼らはそれを認めることはしなかった。
「そのことなんだがね、那木警部。
君の上司にこのことを聞いてみたら『知らない』と言うんだ。
となるとどう言う事かな？
まさか自分の有利になるように勝手に君がやったんじゃないのかね？」
「馬鹿な！自分は法を犯してまでそんなことはしません！」
「しかしなぁ、君の出した書類が何よりの証拠」
「・・・・・・・・・・・・・・」

那木は反論できなかった。
というよりは反論しても無駄だと思った。
「いいかい那木警部。
君は越権行為だけではなく、罪を犯してはいない人間を犯罪人にしようとした。
その行為は警察の人間にとって許しがたい行為だ。
そのような理由で、君を懲戒免職にするつもりだ。
この程度で済むことに感謝するんだな。
それと、余計なことをすればお前を法の裁きにかけるつもりだ、わかったか？
いいな、以上だ」
那木は何も言わなかった。
沈黙がその場を走る。
「分かりました」
ようやく那木が口を開き、会議が終了した。
「どうして、どうして認定しないと嘘をついたんです？！」
那木は自分の上司に食って掛かっていた。
「・・・・・・・・・・・・・・」
上司は何も言わなかった。
周りの同僚達もただ見守っているだけであった。

「なぜ？なぜ誰も俺の質問に答えられないんだ？！」
そんな那木に上司がようやく固い口を開けた。
「世の中にはそういう事があるんだ、那木君。
私達はただ、それに従うしかないんだよ」
「そういう事って何ですか？
筋の通った事をしたのに裏切られるって事ですか？
そういうことがないように我々がいるんじゃないですか？
どうなんですか？」
那木は納得できなかった。
「悪いことは言わない、今すぐ刑事を辞めるのが利口なやり方だよ。
あと、もうこれ以上首を突っ込まないことだ。
これが君に対し、我々ができる最大のことなんだ」
上司はとても申し訳ないという口調で言った。
那木もそれを感じ取ったのか、ただ黙ってその場を去るのだった。
□■□
綾野は団地の一角にいた。
「確か、この辺だと思うのだが・・・？」
一枚の紙切れを元に、あるものを探していた。
「あ！この棟だ！ここにあの、高級ワインの言っている場所があ

るんだな」

紙切れをポケットにしまい、もう片方の手に鈍い光を放つ、アルミ製のアタッシュケースを持ち、その棟に入って行った。

「いらっしゃい。あんた、見ない顔だな」

団地の一室にて、無精髭を生やした、恐らく綾野と同じぐらいの年齢の男が綾野を迎えた。

「そのツラからいくと、公安か？マル暴か？」

「いい所をついていると思うがどちらでもない」

綾野はにこりともせず言った。

「あんたの扱っている商品を買いに来た」

「へえ、あんた、警察のものじゃないんだなぁ。

その人相からいくと、サツか悪党だと思ったんだがなぁ。

まあ、いい。それよりもどんな商品が欲しいんだ？」

男は綾野に中に入るように指示した。

綾野もそれに従うように中に入った。

部屋の中はたくさんのダンボールがあった。

一見すると引越ししたてのようにも見えるが、台所のほうには生活の臭いを漂わせる環境が出来ている。

「そこにある箱、蹴飛ばすなよ。大事な商品なんだからな」

男は頭を掻きながら椅子に腰掛けた。

「ここに俺の探しているものがあると聞いてな。
実はかなり年代ものになるのだが、１０年前の事件の証拠品が欲しい」

綾野は立ったまま言った。

「ほう、１０年前のものねぇ。そりゃ年代ものだわな。
で、何の事件だい？」

男は綾野に「まあ、座れ」と言って聞いた。
綾野は椅子が変色しているのを見て、少しためらったが仕方なく座った。

「竹岡一家事件」
「ああ、知ってるよそれ。
長男以外殺されたって言うあれだろう？
犯人は今をときめく正義のヒーロー、霧山賢四郎国会議員。
すぐに出るよ、それは処分していないからな。
なんせ、当時の現役悪徳警部補がとんでもない値段で俺に売りつけてきたやつだ。
元を取るまで捨てるに捨てられん」

男はそう言うと部屋を埋めるダンボールを漁り出した。

「あったあった、これだよこれ。
何でもこいつは霧山に雇われた殺し屋が保険代わりに撮影した、霧山の犯行を明らかにするビデオテープとその契約書だ。
契約書には実印ではなく、相手の指紋を押印したもんでね。
証拠の価値としては十分。
奴もそれで俺に相当の値段をふっかけたんだ」

そう言いながら男は、そのテープと書類が入っていると思われる封筒を出した。

「では、早速交渉に入るか。あんた、これにいくら出す？」

綾野は確認させろといった。

男もそれに応じるかのように綾野に封筒を渡し、ビデオテープを再生した。

その内容は信じがたいものであった。

綾野は霧山がどうして殺人を依頼したかという理由について苦笑いを浮かべた。

「なんてせこい奴なんだ」

「同感」

綾野の思わず出た言葉に、男も頷いた。

「当時、この証拠を買った後すぐに現役のほかの警官がこいつを買いに来たよ。

でも、こいつを売ってきた奴から事情を聞いたんでしらばっくれて売らなかったんだ。

もしかしたら将来、買いに来る奴がいると思ってな」

男はビデオを巻き戻し、ビデオデッキから取り出した。

そして、綾野から封筒を取り上げた。

「じゃあ、いくらで買うか言ってもらおう」

その言葉に綾野は何も言わずにアタッシュケースを男に渡した。

「それでどうだ」
綾野はケースを開けるようにと促した。
男はケースを開けた、と同時に顔色を変えた。
「おい、マジかよ？」
「少ないか？」
男の言葉に綾野は表情を変えずに言った。
「少ないも何もこいつの値段はせいぜいこの半分・・・いや、もっと少ないぐらいでもいいぜ・・・」
どうやら綾野の用意した金は普通の人間、また、男のような人間も想像しないような金額だったようだ。
「一人の青年の人生を考えれば安いものだ。
で、売ってくれるのか？」
男は、はっ！と綾野の顔を見た。
その表情に血の気はない。
「お、あ、おう。あんたの気が変わらないうちに売るぜ。
あんた、すごい奴だなぁ。せめて、名前だけでも教えてくれよ」
「教えるような名前はないよ」
綾野は商品を受け取ると席を立った。
「いやいや、いい買い物をしたよ」

そう言い残し、綾野は去っていた。

6、真実

那木は町を歩いていた。
町はいつものように活気に満ちていた。
しかし、それはとは対照的に那木の足取りは重かった。
表情には、明るさがなく、暗さだけが表情を作っていた。

「なぜだ・・・・・どうして」

那木は心の中ですっと叫んでいた。
那木はそのまま歩きつづけ、やがて公園に入って行った。
少し汚れたベンチに座ると、那木は今まで自分のやってきたことを思い出した。

あの日の悲しみから１０年、自分は己のみのことも構わずに家族を殺した犯人を探し続け、法の制裁を受けさせるためにここまでやってきた。
しかし、結果はどうだ？
法は何の役にも立たない、悪を裁くはずに警察が何もしてくれない、霧山は弱き者の味方ということでのうのうと生きている。
一体この世は何なんだ？
金さえあれば罪を犯してもいいのか？
償いをしなくてもいいのか？
真実を求めている人間はこうやって左遷されるものなのか・・・

いや、この際そんなことはどうでもいい。
何としても霧山を裁きたい。
それも、ただ殺すのでは駄目だ、奴と同じになってしまう。
そうではない、誰がどう見ても奴が犯罪人だということをこの世

の人間に見せしめることができる方法で、奴に絶対に償いをさせることのできる方法で・・・

那木はふと、ある言葉を思い出した。

『・・・今のお前ではあの偽善者を裁くことは出来ん・・・
だが、俺にはできる、俺にはその力がある』

「・・・あいつだ」

那木は綾野のことを思い出した。
そうだ、あの男の力を借りれば霧山を裁けるかもしれない。
あの男が何者かは知らんが、あいつに初めて会った時、只者ではないと思った。
銀行強盗の件といい、自分を監視していた時といい、あの瞳、あの笑み、あの雰囲気、あいつなら霧山を裁けるかも・・・

「だけど、あのおっさんの事、何も知らないんだよな」

那木は自分の今の状況に一気に失望した。
結局何も出来ない、どうしようもない。
ならばどうする？
このまま自殺でもするか？
いや、霧山を裁くまでは死ねない。
じゃあどうする？
このまま、違法ではあるが刺し違えてでも・・・？！

「そうだ、確かあのおっさん・・・」

那木はにやりと笑い、公園を後にした。

■□■

綾野は車の中で立て続けにかかってくる電話の応対に忙しかった。
あまりに多いので、途中で車を停め応対した。

「おう！綾野。
お前が言っていたあの殺し屋の事だがなぁ、今は林と言う麻薬ブローカーの用心棒をやっている。
確か明日、横浜の海釣り公園でそのブローカーが麻薬を釣りに行くんで一緒に同行するそうだ。
確か朝の５時。
それでその海釣り公園の名前が・・・」
「そうか、ありがとう」
『ＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲ』
「はい？」
「ああ、私。ところで事件は解決したの？
いつまで別荘にいればいいのかしら？
私の方もそろそろ商売を再開したいんだけど・・・」
『ＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲＲ』
「はい」
「あ、綾野さん？私、警視正です。
ご依頼いただいた１０年前の警部補のことですが、２年前に交通事故でお亡くなりになられていまして・・・
ところでなかなか電話がつながらなくて・・・」

電話のベルが鳴らないことを確認すると綾野は再び車を出した。

■□■

自宅に帰ると、日はすっかり落ちていて、太陽の代わりに月が大地を照らしていた。

「はぁ、今日は疲れたなぁ」

何日ぶりの自宅の感触に綾野はほっと気を緩めた。
ソファーに横になると、綾野は宙を見つめ、今までの出来事を整理しようとした。
しかし、そうしようとした瞬間に電話の音が頭の中に割り込んできた。

「はい、綾野です」

綾野は少し不機嫌に言った。

「もしもし、私、先日そちらにお伺いした警察の者です」
「・・・?!ああ、あの那木警部を監視しろと言う依頼を持ってきた・・・」
「ええ、そうです。そのことについて電話をしたのですが」
「どうかしたんですか?」
「今限りでこの件を終わりにしていただきたいのです」
「ほう、別に構いませんが解決したので?」

綾野は意外な報告に起き上がった。

「え、ええ、まあそんなところです。
問題刑事として今日懲戒免職にしたので、後は我々で対処できますので、綾野さんの助けがなくてもいいとの事でして・・・」
「そうですか、それは良かった。
では、明日報酬を指定の口座に・・・」

「その件なのですが、上の方から出せないと伝えておけと言うことでした」
「それは困るなぁ」
綾野は声のトーンを下げて言った。
「上のものの話によると、綾野さんは監視してくれましたが、結局彼には手を下さなかったとの事でしで、払う金はないと」
「監視だけで何もしなかったからって仕事していないと言いたいのか？
だとしたらそいつはとんだ勘違いと言うものだ。
監視と言うのはわざわざ時間を費やして、時間を犠牲にしてやっているんだ。
だからその間は他のことは出来ない。
その辺を理解の上でそういうことを言うのか？」
「さあ、私にはわかりません。
ただ、警察の経費やなにやら削減されてぎりぎりの状態なんです。
それに、我々があなたにお支払いするお金は国民の税金、そういう事で監視だけで何もしなかったという仕事に払うお金はないとの事です」
「ふうん」
綾野は怒りと言うよりもあきれの感情がふつふつと込み上げてきた。
情けない、確かに何もしなかったとはいえ、仕事を依頼してきたのは警察の方である。
なのに、頼まれた事をして仕事のうちに入らないと抜かす。
別にわざとしなかったのではなく、する必要がなかったからだ。
とはいえ、監視も立派な仕事だ。
警察なんて倒産する事もないし、何で依頼に対する報酬ぐらい払

えないのだろう。
綾野はこのまま交渉すれば何とか報酬をもらえる自信はあった。
しかし、とっさにある考えが浮かんだので、交渉はしないことにした。

「そうですか。
そういう事なら結構、ここはこっちもボランティアだと思って報酬の方はあえて目をつぶりましょう。
ただし、あなたの上司に伝えておいて貰えませんかね？
“お金の事をいい加減にしているとそのうち痛い目に遭いますよ”ってね」
「それは、脅しですか？」
「脅し？まさかそんなこと、警察相手にするわけないじゃないですか。
ただ、私の経験上のことを親切に教えようと思っただけですよ。
私もそのことで随分苦労しましたから・・・」
「そうですか。ではそういうことで」

依頼人は理解したのかしないのか、そう言うと電話を切った。
綾野は受話器を置くと再び横になった。
そして、ふうと一つ呼吸するとまた、起き上がった。
「M．I．C．E．を舐めてるとどうなるか、ここは一つ良く教えておかないといけないかな」
そう言い、どこかに電話をすると、綾野は着替えをした。
そして、再びどこかへ出かけた。
「懲戒免職処分になったと言うことは、奴もじっとはしていない

だろう」

綾野は車を走らせながら言った。

「正当に憎き敵を裁く手段を失った人間が、次はどういう行動に出るか・・・」

ここまでを口で言い、その後は心の中で呟いた。

はじめから正当な手段で敵を討とうとした奴だ、それが出来ないと知ったら恐らく考えられるのは2つ。

一つは正当ではない方法で敵を討つ、もう一つはもう駄目だと家族の後を追う。

しかし、あの青年のことだ、どう考えても後者はないだろう。

だとすればあの無謀な小僧のことだ、すぐにでも敵の所へ行くに違いない。

精神的にも追い詰められているだろうしな。

となると、敵のいるところに奴も必ず来る。

綾野はそう考えると体が熱くなり、ついアクセルと踏み込んだ。

「あの青年を手に入れるには今しかチャンスはないだろうな」

そう呟き、光るグランドキャニオンに向かって走っていった。

■□■

都会のグランドキャニオンの中の一つの、大きなホテルで霧山議員主催によるパーティーが行われていた。

福祉団体や国民の代表者たち、彼を支持する資産家や実業家との懇談会のようだ。

「霧山議院の主催する懇談パーティーへようこそ！
ごゆっくりとお楽しみください」

那木はホテルの外の道路を挟む向かい側にいて様子を見ていた。
どうやら招待客以外は中に入れないようだ。
彼はポケットの中に入っている自前で仕入れた小型の銃を強く握っていた。

「では、このパーティーの主役、霧山議員の挨拶を・・・」

那木は自分の体温が上がったのを感じた。
「今だ」
そう直感で感じると、ホテルの入り口に向かって歩き出した。
車が来ていないことを確認すると、広い道路を渡るため、足を踏み出した。
彼の額にたまった汗がゆっくりときれいに整った輪郭を伝った。

「上手くいくといいがな」

そう心に呟きいざ出陣！
と歩みを速めようとした瞬間に、那木の前を一台の車が止まった。

「早まってはいかんな」

車の中から、聞き覚えのある声が聞こえた。
那木はにやりと笑った。

「来ると思ったよ」

那木は、車の中にいる男に対してこう言った。

「しかし、ここまで思っていた通りだと面白いね」
那木は男の顔を見ながら言った。
男もその意味がわかったらしく、助手席のロックを外し、ドアを開けた。
「俺に用があるのなら連絡してくれれば良かったのに」
綾野は助手席に腰掛けた那木に言った。
「だっておっさん、俺に何も教えてくれなかっただろう？」
那木はサイドミラーを見ながら髪の毛を整えた。
「そうか、そいつはすまなかったな。
ところでお前、懲戒免職になったそうじゃないか」
「良く知ってるな」
那木は動じることなく言った。
どうせ、このおっさんは何もかも知っているのだろう、そう思っていた。
「ところで俺に用があると言ったな？なんだ、言ってみろ」
綾野は那木をちらちら見ながら聞いてきた。
その顔が心なしかにこやかだ。
まるで、自分の弟か何かと会話をしているような感じだ。
「・・・あんたの力を借りたい」

「今の自分には限界がある事にようやく気づいたか」
「ああ、やっと分かったよ。
そこであんたが一体何者かは知らないが、なんとなくあんたの力を借りれば何とかなると思ってさ」
「そうか、だが、ただでは貸してやらん。条件がある」

綾野は信号待ちの所で那木の表情を見た。
薄暗くて分かりづらいが悪い表情はしていないようだ。

「・・・俺は敵を討つためにいろいろやって、今すべてを失った。
だが、後悔はしていない。
・・・敵を取るまでは何だって来いさ」

那木ははっきりと言い放った。
しかし、実のところは条件を聞いてからにしようと思っていた。

「いい心構えだ。ならば条件を言おう。
なに、そんなに難しいことじゃないさ。
今までのお前の仕事がハードになったものと思ってくれれば結構。
これからしばらく俺と一緒に仕事をする、つまり、俺の仕事のパートナーになれと言うことだ」

綾野の出した条件に、那木はすぐに返事が出来なかった。
あまりの突然の申し出に正直、悩んだ。
そんな那木の様子を見た綾野は車を停めた。
そこは綾野の店の車庫であった。

「ま、すぐに答えは出ないだろう。
本来ならゆっくり考えろと言いたいところだが、あいにく明朝５時に仕事があるんでね。

悪いがそれまでに返事を考えてくれないか？」

エンジンを止め綾野は言った。

「それとお前、警察を追い出されて泊まる所がないんだろう？
良かったら俺んトコ泊まってけ。遠慮はいらん」

そういうと、綾野は那木を自分の家に入れて寝室へ案内した。

「いろんなことがあって疲れただろう。
そこで十分休むがいい。
それと、俺の条件も考えておいてくれよ。
もしも、ＹＥＳだったら目覚し時計を3時半にセットしておけ。
色々と準備をしなくちゃいけないからな」

そう言い、綾野が部屋を出ようとした。

「おい、おっさん。俺がここ使ったらあんた、どこで寝るんだよ？」

那木は綾野に言った。

「なに、心配するな。俺はベッドは普段あまり使わないんだ。
ソファーの方が寝心地がよくってな」

「でも・・・」

那木が何かを言いかけた時

「そうだ、自己紹介まだだったな。
俺の名は綾野小次郎。言ったぞ？

だから、もう人のことを“おっさん”って呼ぶなよ、いいな？」
綾野は那木の胸元に人差し指を突き刺していった。
「あ、ああ」
那木はこれ以上何も言えなくなってしまった。
綾野はそのまま、寝室から出て行った。
那木はベッドに横になり宙を見ていた。
顔を横にやるとベッドを包む真っ白なシーツが目に入る。
きれいに洗濯してあり、糊もびしっと決まっている。
恐らく綾野は普段このベッドで寝ているのだろう。
自分に気を使ってあんなことを言ったんだ。
そう思うと少し照れくさくなった。
しかし、何であんなに自分に親切なのだろう、当たり前の疑問が那木の頭をよぎる。
しばらく考えると那木は寝室を物色し始めた。
引出しを開けると中からオートマチックの３２口径の銃が見えた。
彼の仕事は自分の想像だが、アメリカで言うところのＦＢＩやＣＩＡみたいなものだろうと思った。
普段は結構やばい仕事をしているのかな、そんなことを考えた。
引出しを戻すと今度はベッドの下を見た。
ダンボール箱が一箱あった。
中を見ると、アルバムが入っていた。
那木は申し訳ないと思いつつ、どうしてこんなに親切なのかという理由があるかも知れないと思い、アルバムを開いた。

綾野に良く似た男とその妻と思われる日系女性、そしてその子供が楽しそうにしている姿がそこにはあった。
那木は思った。
この建物に入った時は、綾野以外の人間がいるような気配はなかった。

「離婚したか別居でいないのだろうか」

そう思いながらアルバムのページを捲っていると最後のページに、一切れの新聞記事があった。
それは、英字で書かれた新聞だった。
その紙片には、綾野の妻と思われる女性と、その子供があった。
那木はなんとか意味を理解しようと、過去に習った英語の技術を頭の片隅から引っ張り出した。
そして、ようやく片言で訳してみた。

『市警警部の妻とその子供、現在指名手配中の凶悪犯に殺される』

那木は息が止まりそうになった。
更に記事を見てみると、所々に『Ａｙａｎｏ』という名前が見受けられた。
すると、その紙片の裏から、もう一枚の紙片が那木の足元に落ちた。
そこには、若かりし頃の綾野の顔写真が載っていた。
そして、再び内容を訳してみた。

『市警警部お手柄！自分の家族を殺害した凶悪犯を自らの手で逮

捕！』

那木は胸が詰まった。
あの男は、自分と同じ境遇であり、そして自分の力で敵討ちをしたのだ。
那木はそう思うと、アルバムを元通りにしまい、ベッドに横になった。
そして、うつ伏せになり、顔を上げた。
ちょうど手の届くところに目覚し時計があった。
那木はそれを手に取ると、時間設定を“３時半”にセットし、横に寝返りをしてそのまま寝た。

■□■

綾野は押入れから銃を出していた。
少し埃がかぶっていて、動かしてみるとギギギときしんだ。
その銃は普段綾野が使っているものよりも軽いものだが、銃身が少し長かった。
綾野はそれを分解すると丁寧に手入れをはじめた。

「あの青年は必ずＹＥＳと言うさ」

そう心の中で呟き、油を注した。
銃を再び組み立て終わった頃、携帯電話が振動した。
綾野はそれに気づき電話を取った。

「はい、ああ、そうか。
夜遅くすまなかったな、今から取りに行くよ、じゃあ」

綾野は電話を切り、軽く身支度をすると、忍び足で出かけた。

『ＬＩＬＩＬＩＬＩＬＩＬＩＬＩＬＩＬＩＬＩＬＩＬＩＬＩＬＩＬＩＬＩＬＩＬＩＬＩ』

目覚ましのベルが、けたたましくなった。
しかし、その側にいた那木は起きる気配がない。
静かに寝息を立てて気持ち良さそうに寝ている。
寝室のドアが開いた。
そして、何をするよりも先に、そのけたたましい音を止めた。
外はまだ暗かった。
電車も通らず、本当に静かなひと時であった。

「３時半にベルが鳴ったということは、起こしていいんだよな？」

綾野は時計を確認すると那木を見た。

「少し安心したのか、よう寝とる」

そう言い、那木の肩を揺さぶった。

「おい、起きろ、一応目覚ましはなったぞ？」
「ン・・・ンンン・・・」

那木は目を開けた。
一瞬驚いた。
ここは一体どこだ？
いつも見る光景とは明らかに違う。
そうだ、思い出した。

自分は警察を追い出されて、あのおっさんの家に連れてこられたんだ。
そして・・・
那木は警察を辞めた現実をここで実感した。
綾野は那木が起きるのを確認すると、さっさと部屋を出た。
「さっさと顔を洗って来い。洗面所は部屋を出て左だ」
那木は慌てて起き上がり、服装を整えた。
そしてまだ目覚めぬ頭と体を無理矢理動かし、洗面所へ向かった。
蛇口をひねり、水を出した。
それを確認するように手をやるとそのまま顔に水をかけた。
とっても冷たく感じた。
顔の神経が大慌てで脳に“冷たいぞ”という信号を送っているのがわかった。
「ひゃぁ」
那木は思わず声を出した。
そして顔を上げると、短く伸びた髭をたくわえている普通の青年がこちらを見ていた。
那木が笑うと同じく彼も笑う。
那木は洗面所の周りをきょろきょろ見回した。
石鹸はある、だが、剃刀が見当たらない。
「おい！おっさん！！」
那木が叫ぶと綾野は何かぶつぶつ言いながらやってきた。

「なんだ」

なんだか少し機嫌が悪そうに綾野が答えた。

「髭を剃りたいんだけど、剃刀ないの？」

那木はそんな綾野を気にすることなく言った。

「ああ、すまん。髭剃りね、はい」

綾野はそう言うとポケットから電動髭剃りをだして那木に渡した。

那木は“どうも”と言いそれを受け取った。

「お前、俺が言ったこと、忘れたか？」

「なに？」

綾野の質問に那木は髭を剃りながら答えた。

「俺の名前だよ、綾野小次郎」

「あ、そう、聞いたよ。それで？」

綾野はとても怒っているようだ。

「俺にはちゃんと名前があるんだから“おっさん”はやめろ。“綾野”と呼べ」

那木はそんな綾野に少し茶目っ気を感じた。

「おっさ・・・じゃなかった、綾野。

あんた、初めて会った時も“おっさん”って言い方嫌がってたよ

な？

・・・案外、年気にしてるの？」

那木はニヤニヤしながら言った。

綾野はムスっと言う表情をしている。

「綾野、あんた、年いくつ？」

「・・・・・・３８」

「じゃあ、おっさんって言われてもしょうがないだろう？

それにあんた、年の割に表情によってはかなり老けているように見えるぜ？」

那木はなぜか安心した。

初めて会った時から今まで、この男は抜け目がなくて気が抜けないと思っていた。

しかし、こうやって会話をしていると、外見とは違った普通の部分が感じられる。

「それに、あんまり気にしていると禿げてくるし、シワも増えて余計に老けてくるよ。

ただでさえあの笑いじわが老けさせているのに、それ以上増えたらジジイになっちまうぜ？」

「何だと？！言わせておけば・・・」

綾野の言葉に那木はケタケタ笑い出した。

綾野も怒りだしそうに見えたが、その一歩手前で那木につられて笑い出した。

「まあいい、とにかくさっさとしろよ。

あまり時間がないんでね。飯食いながら仕事の内容を話すよ」

そう言い残して綾野は去っていった。

「・・・・・・仕事か」

那木はそう呟くと、再び顔を洗った。

食卓には食欲をそそる朝食が用意してあった。
ご飯に味噌汁、厚焼き玉子に芋の煮物、カリカリに焼いてあるベーコンがあった。

「みんなあんたが作ったのか？」

那木は感心しながら言った。

「そうだ、驚いたか」

綾野は茶碗にご飯を持った。
那木が若いのを考慮してか、盛る量は半端じゃない。

「こりゃ盛りすぎだよ」

那木は茶碗に盛られたご飯を見て言った。

「いいから食え」

綾野は味噌汁を盛り終わると勝手に食べ始めた。

「いただきます」

那木はそう言い、食べ始めた。

「で、おっさんの仕事って何？」

那木はおいしそうに厚焼き玉子を食べながら聞いた。
綾野の目元がピクリと引きつった。
それに気づいた那木は、軽くすまんと言って笑った。
綾野は軽く咳払いをした。

「・・・仕事とはお前の家族を直接殺した殺し屋をとっ捕まえることだ」

那木の表情が一変した。
体が熱くなっていくのを感じた。

「もちろん、そいつに命令したのは霧山本人だ。
今、俺の手元に物的証拠もある。だが、念には念を入れておかないとな。
その殺し屋の口から直接犯行のことを言わせるために今日、朝こっ早く捕まえに行くんだ」

綾野はそう言うと、ベーコンを口に入れた。
那木は何も言わなかった、いや、言えなかった。
自然と食べる手が止まる。

「今日、そいつは横浜にある海釣り公園で麻薬ブローカーがヤクを手に入れる為に護衛として一緒に同行するという情報が入った。
そこで、そいつを押さえるのだが、そのためにお前の助けがいる」

綾野はそう言うとテーブルに一丁の銃を出し、那木に差し出した。

「使うことはないと思うが相手は殺し屋だ。
自分が危ないと思ったら構わず撃っていい」
那木は箸を置いてそれを手に取った。
それは思ったよりも重く、銃身が刑事時代に携帯していたものよりも長かった。
「わかっているとは思うが、そいつを片手で撃とうなどとは思うな。
腕が折れちまうぞ」
綾野の言葉は、その銃の威力を物語っていた。
「でも、警察の人間以外が拳銃を持つのは・・・」
「俺が許可する。
俺がいれば仮に警察の人間がいようともお咎めは受けないんだ。
覚えておけ」
綾野はそれよりも食えと那木に勧めた。
那木は思い出したかのように再び食べ出した。
「そうだ、お前にまだ、俺の職業を言っていなかったな。
普段はここの下にある店の経営者、だが依頼が入ればM．I．C．E．の一員だ。
知っているか？M．I．C．E．って」
「一応、噂で聞いたことがある。
ある外国の資産家が正義のために作ったと言う、犯罪者を公安の許可無く裁ける国際的なライセンスで、極秘機関って言うのをね」
「良く知っているじゃないか」

綾野は意外に知られていたことに感心した。

「正式名称、国際秘密凶悪犯罪取締執行機関、M．I．C．E．は国際秘密処刑人機関の略なんだけどね」

「俺も一度、それになろうと考えたことがあるんだ。だけど、なるためには厳しい訓練とテスト、さらに実務経験をたくさんつまなくてはいけなくて、それをクリアした中でも本当にメンバーになれるのはごくわずか、ほとんどそれでメンバーになった人間はいないって聞いたんでね、俺には無理かなと思って」

なるほどねと綾野は思った。

確かに自分の聞いたところによれば、そこからメンバーになった奴はいない。

ほとんどが元メンバーとの接触による抜擢によって一員になるのが普通で、自分もそうだった。

「確かにな。

話だけ聞くとそう思うのが普通だな。

だけど、メンバーのほとんどが・・・いや、全員がテストなんて受けていないのが現実だ」

「どういうこと？」

「要するにテストというのは建前で、実際は現役メンバーによる抜擢採用なんだ。

これは一見いい加減なように思えるが、かえってこの方法は間違いが無い。

もし仮に、悪党がこのテストに受かって厳しい訓練を終えてライセンスを持ったらどうなる？

それではこの組織の存在の意味が無くなる。

だからこういう事を防ぐために抜擢方法を主流としているんだ。

もちろん、抜擢したメンバーにも重大な責任が科せられるんだけどね」
「ふうん、となると綾野、あんたも誰かに抜擢されたわけだ」
「まあな」
綾野はご飯を口に入れながら、もごもごと言った。
「しかし。なんで俺にそんな詳しいことを話すんだ？」
那木は綾野にご飯のお代わりをしながら言った。
綾野は茶碗を受け取ると、にやりと笑った。
「実はね、今からやる仕事の様子を見て、場合によってはお前を抜擢しようと思っているんだよ」
そう言い、ご飯を盛った茶碗を那木に渡した。
「そう言う事か。だけどおっさん、もしも俺にその気が無かったらどうするんだ？」
「その時はその時で考えるさ。それよりも早く食えよ。時間があまり無い」
綾野のその一言を皮切りに、二人は食べることに集中した。

■□■

海の向こうの空がようやく色づいてきた頃、二人の男は陸から飛び出た金属で出来た台の一番先端にいた。
平日のせいか、朝早いにも関わらず人の数が少ない。
落ち着いて釣りを楽しむには格好の条件だった。

男の一人は海に向かって一本の竿を出していた。
隣にいる男は椅子に座って仕掛けを作っている。
一見、普通の釣りを楽しみに来た光景のように見える。
しかし、その表情はそんなものから程遠かった。
竿を出していた男が手ごたえを感じてゆっくりと慎重に釣り上げた。
しかし、その先にはゴミが入っているようなビニール袋だった。
男はマナーがいいのか、釣ったものを海には捨てず、黒いビニールの大きなゴミ袋に入れた。

「丁寧だねぇ」

遠く、双眼鏡をのぞきながら綾野は呟いていた。

「なんだか人がどんどん帰ってくな」

隣で那木が目を細くして言った。

「これぐらいの時間になるとそろそろ釣れなくなってくるんだろう。
俺も良くは知らんが、かえって好都合だ」

綾野はそう言い、双眼鏡をのぞくのをやめると、乗っていた車から降りた。

「俺はこっち、お前は向こう、いいな。一応両方捕まえる」
「ああ、わかってるよ」

そう言うと、二人は動き出した。

■□■

日もだいぶ明るくなり、そろそろ釣りを楽しみに来た“通”達がそこから姿を消していった。
残ったのは“通”ではない人間、ポツポツとごくわずか、数えるほどであった。
綾野はその残っている人たちの中の二人組に近づいていった。
潮風の音で彼の足音が聞こえないのか、構わずゴミ袋を釣っていた。
綾野はポケットの中に隠し持っている銃を固く握った。
そして、どんどん近づいていく。
仕掛けをいじっていた男が、そんな綾野の気配に気づいた。
綾野は両手をポケットの中に入れ、寒そうにして二人の方へ寄って行った。

「釣れますか？」

ここでは定番の台詞を綾野は言った。

「いやぁ、そこそこですね」

竿を下ろしている男がまた、定番の台詞を言う。
仕掛けをいじっている男も愛想笑いを浮かべている。

「さっきから遠くの方で見ていたんですけど、なんだかゴミばっかり釣っているように見えて、お節介だとは思うんですけど、場所を変えてみたらどうかなということを言いに来たんですよ」

いかにも釣りをし慣れている風に綾野は言った。
男は一瞬表情を濁したが、再びにこやかになり、仕掛けをいじっ

ている男の方を見た。

「気持ちはありがたいのですが、もう少しここで頑張ってみて、それで釣れなければ考えます」

「でも、こんなゴミばっかり釣っているのも・・・」

そう言いながら、綾野は側にあった黒いゴミ袋の中を見ようと手を伸ばした。

すると、仕掛けをいじっていた男が慌ててその手を払いのけた。

「何か、まずいものでも入っているんですか？」

綾野は鋭い目で男を見た。

その目つきを見た男は綾野に食って掛かろうとする。

しかし、釣りをしていた、もう一人の男がそれを止めた。

「ゴミを見たってしょうがないでしょう？

やれやれ、お節介なのもいいですけど、あまり押し付けがましいのもよろしくないかと」

もう一人の男が迷惑そうに言った。

「ハハハ、それはそうですね。

でも、ゴミばっかり釣っているのもなんか変ですよね」

綾野は言い返した。

「もしかしたらそれ、ゴミじゃないんじゃないですか？」

綾野がそう言ったとたん、仕掛けをいじっていた男がクーラーボ

ックスから銃らしきものを取り出し、発砲しようとした。
それよりも先に綾野がポケットで握っていた銃を取り出し、男の手を撃った。
その瞬間か、ちょっと前か、釣りをしていた男がゴミ袋を持って二人の横を通り抜け、走り出した。
綾野は追おうとしたが、一人の男を相手するので精一杯である。
綾野は男と格闘しながら逃げた男の方を見た。
後は彼に任せよう、そう思い相手をしている男を一発殴った。

那木は前からゴミ袋を持って走ってくる不信な男を見かけた。
那木はとっさに、その男の走ってくる進路に自分の足を出した。
男は面白いようにその足につまずいて転んだ。
那木は、男を押さえようと上に乗ろうとした。しかし、男はそれを辛くも交わすと、再び走り出した。
那木も慌てて彼を追いかける。
追いかけ続けてしばらくして、人気のない漁業市場の建ち並ぶところに来ていた。
そこで男を見失った那木は無防備に辺りをキョロキョロ見回していた。

「パン」

乾いた音と同時に、那木の腕を何かがかすめた。
慌てて近くの倉庫らしき建物に身を隠すと、腕が熱くなっているのを感じた。
そこを見ると赤く何かの通った跡が滲んでいる。
それほど深くない、那木はそう判断すると、倉庫の影から辺りを見回した。
日照の角度からだろう、人の影と思われるものが微かに見えた。
あそこにさっきの男が？

そう思うと綾野から受け取った銃を取り出し、銃を構えた。

『もしも違ったら？！』

那木は近くに捨ててあった空き缶を拾うと、その影のある方に投げてみた。

「カン」

その音に反応するかのように、その影の持ち主がこちらに向けて発砲してきた。

間違いない、そう確信すると那木はゆっくりと影のほうへ歩んでいった。

重苦しい沈黙を保ちながら那木は迂回しながら男のいた方に近づく。

しかし、そこに男はいなかった。

那木はぶわっと毛穴が開く感覚を覚えた。

と同時に後ろを振り向く。

すると、男が銃を構えて那木を撃とうとして、トリガーを引いた。

那木は反射的に伏せた。

男は一発撃ち終えると再び那木に銃を向けて引き金を引いた。

那木は慌てて物陰に隠れた。

彼の体はびっしょり濡れていた。

とてつもない鼓動が彼の全身を駆け巡る。

「興奮してきたな」

那木は心の中で呟いた。

しかし、その興奮はこの緊迫した中、恐怖から来る興奮ではなく、なぜか快感を感じる興奮であった。

那木の手がガタガタ震える。

「パァン」

隠れていた物陰を銃弾が叩いた。
那木はその音で正気に戻る。

「どうにかあいつを押さえないとな」

あの間隔からいくと、相手の銃は恐らくオートマチックだろう。
だとすると、あいつをしとめるチャンスは少ない。
じゃあ、いかに効率よく押さえられるか、少なくともそのためにはあの銃が邪魔だ。
そう考えたとき、那木は自分が銃を持っていることに気づいた。

「なんとか、相手に気づかれずに銃を上手く撃てる場所はないかな」

那木は辺りを見回す。
しかし、そんな都合のいい場所はなかった。

「・・・自分で作るしかないか」

そう思いつくと、再び銃弾が飛んできた。
那木はとりあえず移動しながら考えることにした。
綾野は縛り付けた男を自分の車の後部座席に乗せた。
そして、綾野はその隣に座り、男に話し掛けた。

「お前、殺し屋のＪ．Ｋだな？」

「さあね」
男は綾野の問いに白を切った。
「さあねじゃ質問の答えにはなっていない。
だが、俺も質問の仕方が悪かったな。
J．K、お前に話しておきたいことがある」
「何のことだ？」
男はさらに白を切った。
しかし、綾野は気にすることなく話を続けた。
「お前、過去にある政治家に頼まれて、ある一家を殺したな」
「政治家ぁ？何行ってんだ」
「政治家の名前は霧山賢四郎、そして殺した家族の名前は竹岡、覚えているか？」
「やっていないことなんか覚えようがないぜ？」
「霧山がなぜあの一家を殺したがっていたのか、理由を知っているはずだ」
「知らねぇよ」
「お前は他の殺し屋とは違って、なぜ殺すのか理由を聞いてから依頼を引き受ける奴だ。
どうしてか知っているはずだけどな」
「・・・・・・・・・・・」
男は黙秘した。
そんな男を見て、綾野は男にとある書類のコピーを見せた。
それは先日、証拠品売りから買った殺し屋の依頼の際に交わした契約書だった。
しかし、男は何も言わなかった。

綾野は構わずに車に取り付けてあるビデオと一体型のテレビを男に見るように促した。
男がそれに目をやると、綾野はあらかじめ入れてあったビデオテープを再生した。
そこには霧山とその男と思われる人物が、殺しの契約を交わしている光景が映っていた。
男の顔は見てわかるように青ざめていった。

「これは・・・」

男は思わず口に盛らした。

「自分の保険として撮ったものが、こうやって仇となって返ってこようとはな」

綾野は男の顔をうかがいながら言った。
男はどうしようもない事実を突きつけられてが、それでも口を開こうとしなかった。

「警察に突きつけたところで意味ないぜ。すぐに釈放になる」

男は得意げに言った。

「お前と警察との間にどんな関係があるかは知らん。
だが、何も警察といっても日本の警察だけとは限らないんだぜ？」

綾野の言葉に男の瞼が引きつった。

「お前をどうにかしたい奴は世界各国にいるんだよ。
日本国内だけで仕事をしておけばよかったものを、欲をかくから

そうなる。
そうだねぇ、もしもお前を渡すならどこの国がいいかなぁ・・・
そうだ、中国なんかどうだ？
同じ東洋だし刑だってそれなりに弾むはずだ、お前なんか生かしてなんかくれないだろうがな」

綾野は楽しそうに言った。
その表情は、形容するならば、獲物を刈り終わった死神のようだ。
「だが、これからのお前の対応によっては考えてやってもいい、どうする？」

綾野の表情を見て、男は状況が飲み込めたのか、ようやく口を開いた。

「・・・確かに俺は１０年前に霧山に頼まれてその竹岡一家を殺したよ。
だが、本来は竹岡光夫だけの予定だった。しかし、竹岡を殺したとき、奴の家族が見ていたんだよ。
だから奴らも殺した。
後から聞いた話によれば、奴にはもう一人長男坊がいたって言うことだった。
そいつは殺してもよかったが、下手に殺して足が付くといけないと思ってやめておいた。
それに上手くいけばそいつに罪がかぶればと思ったしな。
まあ、結果そう上手くはいかなかったけどな」
「で、どうして霧山は竹岡を殺したかったんだ？」
「・・・・・ふふ、霧山は当時、人一人を殺した。
いや、殺したというよりは別の事をしてて、結果死んでしまったということらしい」

「それで？」
「奴、ある女をレイプしたんだよ」
「レイプ？」
予想もしない言葉に、綾野は驚いた風に言った。
「そう、強姦。
で、普通のレイプ犯のように女を犯したわけだが、運が悪かったのか、たまたまその女、心臓が弱かったらしい。
犯している最中に心臓発作で死んじまった」
「それが竹岡とどういう関係が？」
「最後までは見ていなかったらしいが、霧山がその死体を処分するところを竹岡がたまたま目撃してしまった。
竹岡は霧山の顔をはっきり見た。
霧山も竹岡の顔を見た。
これはまずい、そう思ったんだろう。
奴は金に物を言わせて竹岡の身元を割り出し、そして一時は交渉をしたらしい。
だが、その竹岡という奴は運が悪かったのか、人一倍の正義漢で交渉に応じなかった」
「しかし、何で竹岡はすぐに通報しなかったんだ？」
「怖かったんだろうな。
それに下手すれば自分が怪しまれるし奴には家族もいる。
それを考えるとすぐには通報できなかったんだろうな。
その後、俺のところに依頼が来て大金を貰って俺が殺した」
「なるほどね。一応話はつながった。
しかし、殺しの理由なんてたいしたことないな。
福祉のために銀行強盗をするほどの人間が」
「みんな自分がかわいいのさ。で、話す事は話したぞ。
俺をどうしてくれるんだ？」

男は綾野に聞いた。
綾野はしばらく考え込むと、にやりと笑った。
「まず、今言ったことをもう一度証拠としてビデオに撮る。
その後、お前の今までの殺しを免責にしてやる」
「あんたにできるのかよ？」
男は疑いの目で綾野を見た。
「俺にはそれができる。
信じるか信じないかは別だが、どっちにしろこのままではお前は確実に死刑だ。
ならば、僅かな希望にかけるのは悪いことではないと思うが」
男は綾野から視線を外した。
そしてしばらく考えた後、再び綾野を見た。
「ああ、証言してやるよ。
契約では俺が何があっても証拠を消し、俺も裁きの手が伸びないように手はずすると言ったんだ。
しかし、今こうやって何者かに裁きの手を突きつけられている。
この時点で契約無効だ。
奴だけのうのうとさせるわけにはいかん」
綾野はその言葉を聞いて笑った。
勝利の確信の笑みだ。
「しかし、あんたも俺の今までの殺しを免責にするなんて、仮にそれが出来たとすれば、とんだ馬鹿だよ」

男は未だに信じていないのか、そうではないのか、綾野の目をじっと見て言った。

「霧山は今しか裁けんが、お前はこの先もどこかで裁けそうだからな」

綾野はそう言うと、男の口にテープを張り、男を座席に逃げられないように固定した。

那木は逃げ回っていた。
何かを皮切りに相手がバンバン撃っている。
那木はそれをかわすので精一杯だった。

「よくもまあ、あんだけバンバン撃つもんだ。
人がいないとは言え、そのうち弾が切れて・・・？！」

そう呟き那木はひらめいた。
このまま撃ち続ければ弾がなくなる。
その瞬間を狙えば・・・？！
しかし、じっとしていればその分弾がなくなるまでの時間がかかる。
そうなると、万が一逃げられてしまう可能性も大きくなる。
ならば、実を犠牲にして弾を減らすようにするしかない。
そう考えた那木は即行動に出た。
相手は予想通り、那木に向けて銃を乱射してきた。
那木は銃弾をかわしながら、実を低くして走り回った。
そうしているうちに銃弾が発射される音がやんだ。

「今だ！！」

那木は透かさず男の姿を確認した。
男は大慌てで弾を装着している。
那木はそれを確認するか否かすばやく男の持っている銃に向けて、自分の銃の引き金を引いた。
那木の銃弾は男の手の甲に当たった。
男はたまらず手に持っていた銃を放し、うずくまった。
男が顔を上げると那木が銃口を向けて立っていた。

「大人しくしろ」

那木はそう言うと男を縛り付け、側にあったゴミ袋の中を確認した。
中にはビニールに入った粉末のコカインがあった。

「遅かったな」

もう一人の男を連れてきた那木に対し、車の外で待っていた綾野が言った。

「こういうのは初めてなんでね」

那木はそう言うとゴミ袋を綾野に渡した。

「コカインか。こんなものが海に泳いでいようとはね」

綾野はそう言うと、それをトランクに入れた。

「あんたらも苦労しているんだね、ブローカーさん」

そう言うと綾野はブローカーを後部座席に押し込んだ。
「あ、そうそう。J．K、あんたに見せたい奴がいる」
そう言い、那木を呼んだ。
那木は何も言わずに綾野のところへ言った。
「ほれ、この青年、誰だかわかるか？」
「さあな、随分色男みたいだが、色男に知り合いはいないよ」
男は那木を見てすぐに顔を背けた。
「綾野、コイツがあの・・・？！」
那木の表情が変わる。
「J．K、彼はお前が殺した竹岡の長男坊だ」
男は綾野の言葉を聞くと再び那木のほうを見た。
「へえ、このあんちゃんがねぇ。
はあ、そう言えばお前、お袋に良く似てるな。
お前のお袋さん、結構美人だったもんなぁ」
男は冷やかすように言った。
「・・・コイツ？！」
那木が食って掛かろうとしたのを綾野が止めた。
那木は「なぜ止める？！」という顔をした。

「今はやめてくれ。やってもらわなくてはならない事があるんだ」

綾野の言葉に男は「へへッ」と笑った。

「その代わり、用事が済んだら機会をやる、それまで辛抱してくれ」

綾野は男に聞こえないように那木の耳元に舌打ちをした。

「ああ」

那木は低い声で返事をした。

7、判決

「バキ！！」
「ボカッ！！」
「ゲシッ！」

鈍い音が薄暗い部屋に響いていた。
そこは、どこかの倉庫であった。
かび臭さが充満する中、彼はそんなことを気にすることなく殴りつづけた。

「今までに、どれだけ苦しんだか・・・・・・これは俺の今までの苦しみの分！」

そう言うと、那木は男を思い切り拳で殴った。
その音は、倉庫の中に鈍く響く。
男の顔がボコボコに腫れ、言葉を出そうにも痛みが先行して何もいえなかった。

「親父は何もしていなかった。ただ、たまたま現場を見てしまっただけなのに・・・
・・・これは親父の分！！」

もう一発、男を殴った。
男の口から血しぶきが飛んだ。
男はあまりの痛さに綾野の方を見た。
綾野は遠くからその様子を、腕を組んで何も言わずに見ているだけであった。

「母さんは優しくて・・・きれいで・・・人を傷つけるような事をした事のない俺の自慢だった・・・なのに・・・あんな姿にしてしまうなんて・・・これは母さんの分！！」

那木は2発殴った。

「・・・ウッ」

男はたまらずうめいた。

「あの日・・・俺は姉さんに謝ろうとしていた。
姉さんの彼氏にケチつけたんで姉さん激怒して・・・
俺は姉さんの彼氏に悪い噂を聞いたんで姉さんを守りたかった・・・
・
で、実際にその彼氏に会って、噂は嘘だと言う事に気づいた、だけどなかなか言い出せなくてようやく謝ろうと決意した日だったのに・・・それをお前は・・・これは姉さんの分だ！！」

思いっきり力を入れて殴った。
男は勢いで倒れ、そのまま動かなくなった。

「おいおい、死んじまったか？！」

綾野は慌てて男に歩み寄った。

「大丈夫だ・・・それなりに手加減はしているつもりだよ」

那木は拳を握ったまま言った。

「・・・おい・・・あん・・・た・・・話が・・少・・・・・し

違うん・・・じゃ・・・」

男はかのなくような声でやっと言った。

綾野はＪ．Ｋが生きていることに安心すると

「確かに免責してやるとはいった。

ただし、それは法の機関にのみに対しての事だ。個人的なことまで責任は持てん。」

と言い、那木を見た。

那木は立ったまま、歯を食いしばり、涙を流していた。

「少しは気が晴れたか？」

綾野は自宅の一室で２本のビデオテープを見ていた。

「・・・いいや」

那木は握った拳を見つめながら呟いた。

「だろうな・・・気持ちはわかるよ」

綾野は静かに言った。

「心の傷は一生消えることはない。

だが、何も出来ないよりは少しは気が楽になるというものさ」

「・・・・・・・・」

那木は黙っていた。

那木は綾野の過去をあらかじめ知っているため、彼の言葉が心に染みる。

「後は、霧山だけだな」

綾野はそう言うとビデオテープを手にして言った。

「そのテープをどうするんだ？」

那木は重い口を開いた。

綾野は那木を見た。

そして、いたずらっ子のような笑みを浮かべた。

「それは、３日後のお楽しみだ」

■□■

３日後の朝、綾野と那木は朝食を摂りながらテレビを見ていた。

ちょうどワイドショーがやっていて、有名女優の熱愛報道が終わったところだった。

『では、次のニュースです。

今日の午後２時から霧山国会議員が障害者のための寄付金１５００万円と介護用ベッド１０台を寄贈する為都内にあるやまさと養護施設を訪問するとマスコミ各社、関係者にその旨を伝えました。

霧山議員といえば、前代未聞の福祉に巨額の投資をしたことをはじめ、他の国会議員から場寝具を受けようと、この世の弱者を熱心に救おうと行動している現代のヒーローということでも有名で・・・』

「何がヒーローだ」
那木は食べる手を休めて言った。
「知らなければヒーローなのさ」
綾野はなだめるように言った。
「しかし、いいチャンスだな」
「・・・何がだよ？」
綾野の台詞に那木は聞き返した。
綾野は食べるのをやめずに、口に物を入れながらがらしゃべった。
「何がって、奴を裁判にかけるチャンスさ」
「裁判に？だって、奴は今までの罪も金でねじ伏せているんだぜ？
それに確固たる証拠でもない限り国民が黙っちゃいないぜ」
那木はそう言うと再び食べ始めた。
「そのために、俺はお前と行動を共にする前からその証拠集めに精を出していたんだ。
その苦労を報いるためにも絶対にコイツを裁きにかけるのさ」
綾野はそう言うと箸を置いた。
「でも、証拠なんてあるのか？
俺が今まで集めた証拠はすべて処分されているんだぜ？」
「・・・フフフ、世の中にはいろんな奴がいるものさ。
過去のお前さんの家族を殺す依頼をしたという、動かぬ証拠もあ

るし、それをさらにバックアップするために証言ビデオを作った。
ばっちりさ」
綾野は得意げに言った。
「しかし、綾野・・・どうしてそんなにまでしてくれるんだ？
やっぱり・・・」
というところで那木は言葉を止めた。
本当は、あんたの家族が俺の家族と同じように殺されてしまった過去の影響か？と言おうとしたが、その出来事は本人の口から聞いたわけでもないし、自分だったらあまり触れられたくないよな、と思い止めた。
そんな那木の言葉に対し、綾野は自分の使った食器を片付けながら那木の顔を見た。
「何言ってんだ？
俺は別にお前のためにやっていたわけじゃない。
つい最近までお前の存在すら知らなかったんだ。
それにもしもお前のことを知っていたとしても依頼でもしてこない限り、こういう形で霧山にアプローチしたりしない。
たまたま友人から銀行強盗の件で黒幕を暴いてくれという依頼があって、それを調べていたら黒幕が霧山だったんだ。
そして、霧山のことを詳しく調べていたら、芋づる式に今回に至っただけだ。
勘違いするなよ」
綾野は本当のことは言わなかった。
嘘ではないがきっかけは違う。
もしも本当のことを言ったら、後々厄介になるに違いない、それ

に知らない方が良い事だってある、そう思ったからだ。

「なんだ」

那木は無邪気な顔で言った。
その顔を見て、なぜか綾野は急に照れくさくなった。
そんな綾野の顔を見て、那木はおかしくなって笑った。
綾野は少し困った顔をするしかなかった。

食休みをしていると、一枚のファックスが届いた。
那木がそれに気づき、綾野を呼んだ。
綾野はというと、時間が少しあるので店の在庫整理をしていた。
那木に呼ばれて綾野は2階に上がっていった。

「おう、やっと来たか。意外とてこずったんだなぁ。
まあ、間に合ったから結果オーライだな」

綾野はファックスの内容をみて安心した。

「何なんだよ？」

那木はすることもなく、テレビを見ながら綾野に聞いた。

「いやな、これも霧山を裁く際に有効な証拠さ。
それと、お前を解雇した警察の不祥事を証明する証拠だ」
「何？！」

那木は急に体に力を入れた。

「お前が集めた証拠がどんどんなくなっていったというのは、警

察が一枚かんでいたのさ。
あと、１０年前の事件の時の証拠がないってのも奴らの仕業。
霧山に買収されていたんだよ。」
綾野はファックスの紙をペラペラやりながら言った。
那木は何も言わずに、呆然としていた。

□■□

綾野と那木を乗せた車はテレビで言っていた「やまさと養護施設」へ向かっていた。
「しかし、どうやって奴の犯罪を世間に知らせるんだ？」
那木は窓から入ってくる風に髪を靡かせながら言った。
「あいつの寄付金寄贈会にはたくさんのマスコミがやってくるはずだ。そいつを利用する」
「利用するってどうやって？霧山は今や国民的政治家だぜ？
ついでに言えばマスコミすら霧山の味方だ、あいつを批判する輩なんて相手にもしてくれないさ」
那木は綾野の方を見て言った。
「馬鹿だな、どうしてお前は何でも真正面から行こうとする？
あの証拠ビデオを流してもらえる手段なんていくらでもあるさ」
「馬鹿で悪かったな。俺は正々堂々とやるのがモットーなんだ、何が悪い」
那木は綾野の言葉に少しカチンときた。

「何も、正々堂々＝真面目じゃない。
相手を合法的に裁くためには時には違う角度から責める必要がある。
その結果、裁くときに正々堂々裁けるんだったら、違う角度からのアプローチも結果、正々堂々じゃないのか？」
「しかし・・・」
「正義ぶるのもいい。
だがな、世の中それだけが通用するなんて、そんなきれいな話はない。
時には荒れた道を通らなきゃいけない時がある。
そういうもんじゃないのか？」

那木は綾野の言葉に面白くなさそうな顔をした。
綾野も那木のそんな表情を見て、不服なのはわかるがな、と思った。

「ま、お前はまだ若いんだ。そういうのを知らない方がいいかもな」

綾野はフォローを入れた。
那木もいくらかは綾野の言わんことを汲み取ったのか、機嫌を直した。

二人は養護施設に着いた。
時間があと１０分少々しかなく、マスコミやその他関係者がオンエアの準備でてんてこ舞いだった。
綾野は那木に「待ってろ」と言うと車から降りて養護施設の裏口へ向かった。
那木は何も言わずに、ただそれを見守っていた。

「あのぉ、すいません」
綾野は関係者の人間に声を掛けた。
「はい？今忙しいんです。後にしてもらえませんか？」
関係者の女性は迷惑そうに言った。
「いえ、それが・・・実は私、栃木にある養護センターの方から霧山議員宛てのメッセージを録画したビデオテープを持ってきたのですが・・・」
「ビデオテープ？
ああ、だめだめ、忙しいの。用がないならあっち行って」
女性は綾野を冷たくあしらい、その場を去った。
その様子を見ていたマスコミ関係者の一人が綾野に近づいてきた。
「どうなさったんです？」
３０代前半の男が声を掛けてきた。
綾野は困った顔をしてその男を見た。
「いえ、実は栃木から遥々霧山議員を応援する養護センター入院中の方々のメッセージを録画したテープを持ってきたんですよ。
だけどここの方取り合ってくれなくて・・・
困ったなぁ、全国放送で流してもらおうと持ってきたのに・・・
施設のみんな、楽しみにしているんですよ。ほら、これが施設の書類」

男は書類を見てちょっとばかり考えた。
確かにそれは信用の持てる書類に見える。
でも、もし悪戯だったら・・・かといって確認する時間はない・・・
男はそう考え、綾野の顔をみた。
とても悲しそうな顔に見える。
さらに男は考えた。
もしもこれが本物ならば自分の局の特ダネになる。
他の局より一歩リードできる。
そもそも特ダネを手に入れるには多少の危険はつき物だ。
それに、その男の表情を見る限り、嘘をついているようには思えない。

「・・・よし、いいでしょう。うちの局で何とか放映しましょう」
男は一大決心をした。
綾野はその言葉に表情を明るくして、ビデオテープと書類、そして持っていった封筒をその男に渡した。

「この封筒は？」
「それは、声の出せない方からのメッセージです」
綾野は安心した顔で言った。
「なるほど、それでは霧山議員に渡しておきましょう。
任せてください！！わざわざ遠くからご苦労様です」
「ありがとうございます」
男はそう言うと、大急ぎで去っていった。
男の後姿を見ていた綾野の表情は、いつの間にか、悪魔のような

笑みに変わっていた。

「そろそろだな」

那木は車の中で腕時計と睨めっこしていた。

「お待たせ」

綾野が運転席に乗り込んできた。

「上手くいったのか？」

「まあ、第一ラウンドはな」

そう言うと車の中に取り付けてあるテレビのスイッチを入れた。

「さあ、これからが第二ラウンドだ」

綾野は那木の方をぽんと叩いて言った。

■□■

『それでは寄付金１５００万円と介護ベッドの贈呈です！！』

カメラの特殊効果により、霧山の華やかな贈呈式が執り行われた。

霧山はマスコミの声に答えるかのようにカメラに向かってにこやかな表情で手を振った。

「霧山議員、今回このような催しをテレビを通じて行ったのはどうしてですか？」

「それはもちろん、これからの時代、福祉というものの重要性を

訴えるため、そして、障がい者やその他弱者に夢を与えるためです」
「しかし、今回はかなりの金額を寄付したようですが・・・」
「かなり？まだまだ私としては少ないぐらいですよ。
財力があるのなら、もっともっと寄付したいぐらいだ」

「何がもっと寄付したいだ。人を殺しておきながら」

那木はむっとした表情で呟いた。

「まあ、もう少し余裕を持って見ろよ。
これから正義のヒーローがどのように変わっていくかがわかるから」

綾野は頬杖をして薄笑いを浮かべて言った。
そう会話している間にも贈呈式は続いていた。

「霧山議員、実は我がテレビ局が独占で入手した他の施設の方のメッセージがあるので見ていただけないでしょうか？」

とある記者の言葉に、霧山は愚か、他の局の記者も驚いた。

「・・・それは願ってもないことだ。是非見せていただこうか」

霧山は嬉しそうな表情で言った。
と同時に、これは自分の株が上がるぞと思った。

「では、どうぞご覧ください」

そう言うと、記者は臨時で用意したビデオとテレビを出してきた。

他の記者もそれに注目する。

「さあ、第2ラウンドだ。一気にノックアウトするなよ」

綾野はテレビを見ながら言った。

その様子はあたかも、K－1観戦でもしているかのようだ。

那木も、そんな綾野の言葉にテレビに集中した。

しばらく沈黙が走った。

それはまるで、嵐の前の静けさのようだ。

言い出した記者がビデオを再生した。

『・・・・・・・・え・・・・あ・・・・・・・・

こんにちは霧山さん。この度はこの場を借りまして、現在連続して起こっている銀行強盗の件に、あなたが関わっているという事を証言したいと思います』

そこに出てきたのは、綾野に捕らえられた銀行強盗だった。

その映像が流れたとたん、辺りがどよめいた。

霧山の表情も、気が気じゃないが、何とか平静を装った。

「ははは、何者かの嫌がらせか？

まったく、常識がないというのか、愚かというか・・・」

『まず、私が何者かというと、霧山に頼まれて銀行強盗を働いているメンバーのリーダーです。

私は警察に何回か捕まっているので、警察の方に聞けば私が強盗だということがわかると思います』

テレビを見ていた那木が驚きの表情をしていた。
綾野は黙って見ている。

『皆さん、霧山さんは弱き者を助け、強きものを挫く、現代のヒーローと思われている方もたくさんいらっしゃるようですが、実のところ、それほどすばらしい人間ではないんですよ。
それどころか極悪人だ』

「いつまでこんな下劣なものを流しているんだ！！
早くビデオを止めたまえ！！」

霧山はそのＶＴＲが流れているテレビを隠すようにその前に立った。
しかし、近くにいた護衛の警察官の一人が

「確かにその男、何度か顔を見たことがある」

と言うのが聞こえると、記者はビデオテープを止めることはしなかった。
それどころか、皆スクープと言わんばかりにそのＶＴＲを必死にカメラで映そうとしていた。

『霧山は私達に強盗をさせて、そしてその金でいろんなところに寄付をしたり、時には事がバレないように警察の人間を買収して、私達を釈放したり、自分の有利なようにやっているんです。
・・・そうそう、そのことを示す書類だってありますよ。ほれ、これがその契約書』

テレビ画面に映し出された契約書には、確かに霧山の犯行を示す

事柄が書いてあった。
実印まで押してある。

「・・・陰謀だ・・・何者かが私のやっていることが気に入らなくて私を罠にかけようとしているんだ。
第一何で私が銀行強盗をしなくてはならん？
私は汚い金で人を救おうなどとは考えたこともない」

霧山は声を震わせて言った。

「まさか、あの男が銀行強盗に本当に噛んでいようとはな」

那木はテレビを見ながら呟いた。

「ふふふ、これはほんのジャブに過ぎんさ。
この後、とんでもない技が入る。
・・・絶えられるかな？」

綾野のテレビを見る表情はとても冷たい。
彼の顔を見た那木はそう思った。

『ま、信じるか信じないかは皆さん次第ですが、私は誓って嘘は言いません。
それでは皆さん、さようなら』

その言葉を最後に、男の証言は終わった。
皆、それを待っていたのか、一斉に霧山に質問を投げかける。

「霧山議員！！今のは事実なのですか？！」

「あの男に見覚えはありますか？」
「霧山議員！！」
「議員？！」

猛烈なフラッシュの連射に霧山は目を伏せた。
そして、目を伏せたまま霧山は弁解をした。

「私はあんな男の事は知らん！！
会ったこともないし、今までその存在すら知らなかった」

霧山が必死に記者の質問に抵抗していると、再びテレビ画面に人が現れた。
先ほどの男とは違う、別の男だ。
霧山はこの画面を見て、顔から血がサーっと引いていったのがわかった。
それは彼の顔を見ている人間にもわかる豹変振りだ。

『どうも、霧山。俺の顔を見るのは１０年振りか？
あの日以来、俺もあんたも上手く生きてきたよなぁ？
まさか、俺の顔を忘れたとは言わせないぜ？
あんたが雇った殺し屋のＪ．Ｋだ』

Ｊ．Ｋと名乗る男はニヤニヤしながら喋っていた。

『１０年前。あんたは人を殺したよなぁ？
確か、心臓の弱い女を犯して、女は最中に心臓発作を起こし、結果死んだ。
そして、たまたまその女の死体を片付けようとしていたところ、竹岡光夫という、ごく普通のサラリーマンに目撃されてしまった。
政治家として将来有望視されていたあんたは、その不祥事を何と

かもみ消そうと、その男と交渉を試みた。
しかし、彼は断った。
そこで俺にその男を殺すようにと依頼したわけだ。
まあ、俺としては仕事だし、何よりも金が良かったんで引き受けた。
そして、仕事をした結果があの、１０年前の竹岡一家殺人事件だ。
皆も僅かには覚えているだろう？
残された長男坊がとても不憫な、そして、あんだけの殺人で警察が証拠をいっさい見つけられなかったといわれた完全殺人のことを。
実はな、あれ、裏で霧山が警察の上層部の一人を買収して証拠隠滅をしていたんだよ。
そう、警察の人間も噛んでいたんだよ。
とんでもない奴がいるもんだ。
だけどな、世の中っていうのは上手く出来ているもんで、１０年前の証拠を大事に持っている奴が居たんだとよ。
まあ、とりあえず見てくれ』

霧山は無言のままだった。
記者がテレビに視線を集中させる。
画面は上手く編集してあって、ワイドショーを見ているかのように、その証拠のＶＴＲに切り替わった。
それは、なにやら若い頃の霧山とＪ．Ｋが殺しの契約を結ぶシーンだった。

『そう言う訳だ。Ｊ．Ｋ、君のことはある情報筋から聞いている。
腕前も確からしいな。
では、これがその注文の人間だ。
しかしなぜ、こんなものを撮る？』
『まあ、保険って奴だよ。
こういう商売をやっているといろんなことがあってね。

万が一、裏切られるようなことがあればコイツを出すところに出すんだ』
『用心深いんだな。まあいい。
それだけ信用できるということか。
私として見れば君がきちんと仕事をしてくれれば悪いようにはしない、それどころか万が一、警察に証拠が渡ってもそれを消滅させる準備さえ出来ている。
安心して仕事をしてきてくれ』
『そういうことか。準備がいいんだな。
では、この書類に印鑑ではなく、あんたの親指の指紋を押してもらおう』

そういう会話がなされながら、霧山が契約書に親指の指紋を押している光景が映し出されていた。
その後、J・Kは霧山にどういう事情でその男を殺すのかを聞き出した。
霧山は先ほどの男の言ったことをそのまんま述べた。

そして、画面は再び男の証言シーンに戻った。

『先ほどの書類は恐らく、このビデオを受け取った奴が持っているはずだ。
このビデオを製作した奴がそうすると言っている。
でも、くれぐれも警察の人間になんか渡しちゃいけないぜ。
あの時のように消されちまうからな』

そのことを聞くと、綾野からビデオを渡された記者は封筒の中を開けた。
すると、その中には画面に映っていたものと同じ書類が入ってい

た。
周りの記者がそれをカメラに収めようと必死に動いた。
記者はこれまでの経緯から事の重大さに気づき、その契約書をきちんと出し、他の報道者にもわかるように提示した。

それは日本中に流れた。
綾野たちもそれを他の人たちと同様に見ていた。
那木は綾野の方を見た。
綾野は那木を見ずに笑っていた。

「これはK．O．・・・だな」

証言ビデオは尚も続いた。

『まあ、そういうわけで霧山は犯罪人なんだよ。
今、何のつもりでかは知らないが、弱者の味方なんて言って良い人ぶっているがな。
ま、そういうことだ。
じゃあ、俺もこの辺で終わらせてもらうぜ。
とある人物によって免責になるんだ。
国民のバッシングを受ける前にオサラバするよ。
あ、そうそう、このビデオを製作した奴の話によると、竹岡の息子はこの後、犯人を、つまり霧山を捕まえるために警官になったそうだが、警察の連中、自分らが噛んでいるもんだから、彼をクビにしたそうだ。
警察もひどいもんだよな。
ところで、警察の上層部が悪さをしたら、誰がそいつらに処分を下すんだろうな？
まあ、俺の心配することじゃないか。

じゃあな、それだけだ』

J．Kがそう言うと、ビデオは終わった。

マスコミ関係者や養護施設の関係者の視線が一気に霧山の方へ向いた。

「わ・・・私は関係ない！！

私をよく思っていない奴らが仕組んだ陰謀だ！！

私じゃない！！私は何もしていないんだ！！」

霧山の弁解をよそに、各局のレポーターがこの事実をレポートし始めた。

警備に当たっていた制服警官等は、霧山をどうするかを決めるため、署へ電話をしている。

「恐らく、警察の奴らも黙ってはいられないだろう」

綾野は車の椅子にもたれながら言った

「・・・・・・・・・・・・・」

那木は何も言わずにその光景を見ていた。

「どうした？嬉しくないのか？」

綾野は何も言わない那木を気遣うかのように、那木の顔を見て言った。

「・・・・・・・・・・・・・」

那木は綾野の質問に返事をすることもなく、苦笑いを浮かべて首を横に振った。

そして、再び画面に映る霧山を、身動きせずに見ていた。

8、綾野と那木

あれから一週間が経った。
綾野はいつものように、電車の音が響く小さなラジコン兼玩具店で、外の広場でミニ四駆を走らせている子供達を眺めながらのんびり自分のラジコンのヘリコプターを整備していた。

「仕事に協力するといいながらあいつ、結局約束をすっぽかしたな」

そんなことを思いながら那木のことを心配していた。

「まあ、霧山は無事警察に捕まって逃げられるような状態じゃなくなったし、世間に致命的な裁きを受けた。そしてこれから先、法律に裁かれる」

整備の手を休め、コーヒーを口にした。

「結果、霧山を裁くことは出来た・・・が
・・・できれば自分で裁いてやりたかっただろうな」

目を細め、外を見た。
家族の敵を取るためだけに１０年間を過ごしてきた人間が、目的を果たしたら今後、どういう風に生きていくのだろうか・・・

綾野はコーヒーを飲み干し、再びヘリコプターの整備をはじめた。

■□■

彼は町の一角で流れ行く人を見ていた。
ＯＬ、営業マン、フリーター、主婦・・・いろんな人が流れて行く。
彼らは明らかに何かの目的を持って流れている。
それは大きかれ小さかれ、とにかく生きる目的を持っている。
那木は自動販売機からジュースを買うと「プシュ！」と勢いの良い音を立てて開けた。
「これからどうして生きていけばいいのだろうか」
ジュースをすすり、考えていた。
立っているのも足が疲れるので、人の流れにジャマにならないように、その場にしゃがみこんだ。
そんな彼を、何人かの人間が彼の間を通り過ぎようとするたびに見ていく。
那木はそんなことを気にすることなく、そんな人の流れを眺めていた。
「霧山は確かに裁かれた」
那木は呟いた。
しかし、その声は人の足音にかき消された。
確かに裁いた。
人の力ではあるが、自分の力では無理だったんだ、裁く事が出来ただけでもよかったさ・・・だけどな・・・
那木は今の自分に気力がないのを感じた。
なんだか、目的を果たした満足感と、することがなくなった虚しさが彼の中に同居している。

あの後、警察から免職を取り消しにするから職場復帰しないか、という話があった。
だが、那木は断った。
どうしてだろう、自分でもそう思ったがなぜか復帰はしたくなかった。

「そういや、あのおっさんとの約束もすっぽかしたんだな」

那木は綾野の顔を思い出した。
変わったおっさんだ。
そもそもあんな老け顔しておきながらおっさん扱いを嫌がる。
なんとあれで３８歳とは驚きだ。
基本的には良いやつそうだが、時折見せる、悪魔のような表情が奴を冷たい人間だと思わせる。
自分も刑事をやっていたころいろんな悪人を見てきたが、未だかつてあんなぞっとするような感触の奴はいなかった。
そもそもあの男、何でＭ．Ｉ．Ｃ．Ｅ．なんてやってるんだ？
見ず知らずの自分をパートナーにしたかったんだ？
・・・第一あの男、一体何を考えている・・・？！
ジュースの缶を握る手が熱くなっていた。
那木は再びジュースを飲み、立ち上がった。

そして、行く当てもなくぷらぷらと歩き出した。

気づくと那木は、綾野と2度目に対面した公園にいた。
いつのまにか夜になっていて、辺りは公園の街灯で照らされていた。
遠くの方で一人のホームレスが雨露を凌ぐためのダンボールを持ってどこかへ行った。

「俺も、彼らと同じ、居場所がないんだな」

冷えてきた体をさすりながら、座っていたベンチに横になった。

「これから俺は、何を目標に生きていけばいいのだろう・・・」

この１０年、ただ霧山を裁くだけにがむしゃらに生きてきた自分にとって、これは大きな課題だ。

１０年の目標を清算しても、昔のような幸せだった日々は帰ってこない、自分の手元には悲劇の男の名を捨てた、何もない男「那木貴也」が残っているだけだ。

そんなことを考えながらそろそろ眠くなってきた頃、助けを求める男の声が聞こえてきた。

那木は反射的に身を起こして声の方向へ走り出した。

そこでは、五人の中高生ぐらいの少年達が、一人の会社帰りのサラリーマンに暴行を加えていた。

一般的にいう「親父狩り」の光景がそこにあった。

「お前ら、何している！！」

那木は大声で怒鳴った。

少年達は一瞬びくりとして那木の方を見た。

「なんだよあんた」

少年の一人が、那木が一人だけだと確認した後にこう言った。

那木はしまったと思った。

自分はもう警察の人間ではないんだ、ただのプータローだ。

声を掛けたがいいが五対一では確実に彼らにやられてしまう。

だが、那木はここで引く気にはなれなかった。
一人の無力の仕事帰りのサラリーマンが、自分の欲望のためだけに動いている愚かな少年達に襲われている。
那木の理性が働かない部分が彼をじっとはさせなかった。

「気にいらねぇ、こいつも殺っちまえ！！」

一人の少年の言葉を皮切りに一斉に少年達は那木に襲い掛かる。
那木も必死に抵抗するが、やはり多勢に無勢、少年らに押さえられてしまった。
そして、少年が那木の顔にパンチを食らわそうと拳を上げた。
しかし、拳は飛んでこなかった。
その少年の背後で何者かが彼を捕まえて、そのまま茂みの方へ放り投げた。
やられていたサラリーマンか？
そう思ったが、彼は那木の視界の中でうずくまっていた。
警察ならば行動よりも先に声をかけてくるだろう、じゃあ誰だ？
那木を抑えていた少年らが異変に気づき、作戦変更、二手に分かれて那木に二人、もう一人の見えない敵に二人で攻撃をはじめた。
二人ならば何とかなるかも、那木は彼らの攻撃を辛くもかわしながら反撃の機会を窺っていた。
“もう一人”の誰かは襲い掛かってくる少年らに対して殴ろうとはしなかった。
その様子を怯んでいると思った少年らは一気に“もう一人”に殴りかかった。
“もう一人”はそこにできる隙を狙っていたのか、手に持っていた何かを少年らの顔に浴びせた。
すると少年らは殴ろうとしていた手を下ろして、顔に手をやってうずくまった。

「ぐあぁぁ！！」
「いてぇ！・・・しみる・・・目にしみるよぉ！！」

その光景を見て、先ほど投げ飛ばされた少年は「仲間を呼んでくる」と叫び、逃げようと走り出した。
それに気づいた“もう一人”は少年を追いかけた。
普通の状況から見れば、見た目４０代そこそこの男性のようである“もう一人”が、元気いっぱいの１５，６の少年の足に追いつくはずがない、誰もがそう思う中、“もう一人”のその男はぐんぐんと少年との距離を縮めていった。
そして、少年に手が届く距離になるとその男は少年を押し倒し、顔面に催涙スプレーを思いっきり浴びせた。
驚くことにその現場は那木たちのいるところから５０メートルもないところであった。
男は捕まえてきた少年を連れてくると、他の少年とまとめてもがいている手を取り、彼らの行動を奪うように彼らの親指同士をきつく縛りつけた。
一見、頼りないように見えるが、見た目とは裏腹に、少年達の行動を十分奪うものであった。

那木は二人を相手に激しい攻防戦を行っていた。
プロレスなど、“複数”対“複数”の対戦をやる格闘技の試合では、２対３や３対４などの場合は一人の差があっても大きな不利ではないが、１対２の場合では２対３などとは状況や試合の有利不利が違ってくるものである。
このような例からいって、那木がどれだけ厳しい状況で戦いを強いられているか、なんとか倒れずにしのいでいるとは、やはり警官時代の訓練のおかげというべきか、彼がまだまだ若いというところである。
しかし、若いとは言え体力には限界というものがあり、那木は足

元を取られ、倒れてしまった。
倒れてしまってはよほどの強さがない限り断然不利である。
少年達は一気に形勢を有利にして、地面に倒れこんだ那木をボコボコに蹴り始めた。
しかし、それは長くは続かなかった。
少年の一人に対し、何者かがプラスチックのようなもので殴りかかってきた。
少年が後ろを振り向いた。
そこには、恐らく公園の砂場から持ってきたのだろうか、子供の忘れ物の玩具を持った、襲われていたサラリーマンが回復して参戦してきたのである。
少年の一人は逆上して那木を攻撃することを止めて、そのサラリーマンを追いかけだした。
1対1ならば訓練を積んでいる方が有利というもので、今までやられていた那木が反撃を開始した。
すると、数分もしないうちに少年を押さえつけた。

那木は、サラリーマンの方が気になり、そちらの方を見た。
しかし、心配は無用といわんばかりに、加勢に来た男の手によって既にその少年も束縛されていた。

「助けていただき、ありがとうございます」

警察が少年らを連行して詳しい説明も終わり、一件落着したところで襲われていたサラリーマンが那木ともう一人の男に深々と頭を下げた。

「どういたしまして」

もう一人の男が淡々と言った。

そして、一応のお礼が済むと、サラリーマンは警察の手によって、自宅まで帰った。

騒ぎも一段落して、辺りがいつものように静まり返った。

「お前は本当に無茶苦茶な奴だな」

男は那木に向かって言った。

「今回はたまたまガキンチョを送ってきた帰りにここを通りがかったからいいけど、でなければここでのたれ死んでいたところだぞ？」

那木は図星を突く男の顔を見た。

「・・・本当、俺何してるんだかね・・・おっさんがいなければ死んでたな、俺」

那木は男、いや、綾野に言った。

綾野はそんな那木の様子をじっと窺っていた。

そして、綾野は呆れ顔をしてため息を一つ吐いた。

「お前、宿はあるのか？」

「いいや」

「親戚は？」

「この辺にはいないよ」

「友人は？」

「いない」

「・・・所持金は？」

「一応貯えはあるけど、銀行が開いてなきゃ使えない。
クレジットカードも警察を辞めちまったから使えない。
現在財布には2，000円と小銭がちょっとさ」

綾野がマジかい?！という顔で那木を見た。
那木も本当だよという表情で答えた。

「・・・あぁ・・・なあ、お前、これからどうしようと思っているんだ?」
「さあね」

那木は答えた。
確かにそう思っている。
綾野は那木の言葉に顔を横に振り苦笑いを浮かべた。

「・・・明日からどうしようかな」

那木は呆れている綾野をよそにポツリと呟いた。
二人の間に沈黙が走った。

夜空の月がそんな二人を照らしていた。

「今まで俺は、犯罪という世界の中で生きてきた。
とても刺激的でやりがいがあって、何よりもダイレクトに悪人どもをとっ捕まえるのに快感を感じていた」

那木は誰に言うわけでもなく語りだした。

「俺の親父は人一倍の熱血漢でね、サラリーマンやってたけど本当は警官か学校の先生をやりたかったと言っていた。

本当、そんなに必要ないよと言うぐらい、正義感の強い人だった」
綾野は空を見上げながら、語っている那木を見た。
「俺はそんな親父の背中をいつも見ていた。
反抗期といわれる時期は否定しようとしたこともあった。
だけど、否定は出来なかった。
そして、いつの間にか、自分も親父みたいな人間になろうとしていた」
「いい親父さんだったんだな」
綾野のそんな言葉に、那木は一瞬、表情を変えた。
一瞬ではあるが、その表情が悲しみと誇りで満ちた表情であったのを、綾野は見逃さなかった。
「・・・そして、親父を、家族を亡くしてなんだかんだで１０年が経ち、ようやく自分を見る機会が出来て気づいた」
「・・・」
「俺もいつのまにか親父そっくりになっていたよ」
那木はそう言って、ふふふと笑った。
「だからさ、さっきみたいな犯罪を見逃せないんだ。
自分ひとりではどうしようもないとわかっていても、それでも放っておけない」
「ふうん」
「あんたは俺の見る限り、正義感はあるみたいだけど行動は俺とは正反対だ。
だから、あんたから見れば俺のやっていることは馬鹿馬鹿しく思えるだろう？」

那木はそう言うと綾野を見た。
綾野は微笑を浮かべ、夜空を見ていた。

この青年は今まで、家族を殺した犯人を探すことで精一杯で、人にこうやって自分の気持ちを打ち明ける機会がなかった、打ち明けられるような人間が側にいなかった。
長い間自分の中で苦しみ、悩んだに違いない。
しかし、今、自分にこうやって話している、彼にとって、自分はそういう存在なのか、綾野はそう思った。

「確かに馬鹿だな。もっと良く考えて、慎重になるべきだ」

綾野は思っていることとは違うことを口にした。
なぜかはわからないが、この青年にはこの言葉の方がいい、そう思ったのかも知れない。

「あんたならそう言うと思った」

那木は思っていた返事が返ってきて安心した。

「そこで、俺はいろいろ考えた。俺にはやっぱり普通の職業は無理だ」
「同感だな」

那木は綾野の言葉に少しムッとする振りをした。
しかし、その後笑った。

「俺にはやっぱり警官が向いているのかも。だけど、警官もダメだ。

最近はサラリーマン化してきて、きちんと仕事を仕様とする人間がいない。
金金でお金のことで頭がいっぱいな奴が多すぎて、正義漢の俺には居辛い。
じゃあ、俺に向いている職業は他には思い当たらない」

那木はそう言って綾野の方を見た。
綾野はその意味がわかった。

「M．I．C．E．にはお前みたいな奴がたくさんいる」

綾野は那木の方に向き直って話し始めた。

「人間の作った不完全なルールの中で、裁かれるべきはずの人間が裁かれず、毎日泣き寝入りしている人間が、この世にはどれだけいることか。
・・・M．I．C．E．はそんな人間のために、法で裁かれない人間を国際的ライセンスによって裁く機関だ」
「・・・・・・・」
「・・・君は俺の見る限り、M．I．C．E．に最も適した人材だと思う」
「そうかい」
「しかし、お前は一回俺との約束をすっぽかしているなぁ？」
「・・・・・・・」

那木は少し不安になった。
しかし、綾野はそんな彼に優しく微笑んだ。

「本来ならば見送るところだが、今回は状況が状況だけに仕方のないことだと判断することにしよう」

「それじゃあ・・・？！」
綾野は那木の肩に手を強くポンと置いた。
「お前が今後、M．I．C．E．として活動できるように俺が本部に推薦してやる」
那木は表情を明るくした。
「だが、条件があるぞ」
「条件？」
「お前は一人前のM．I．C．E．とするにはまだまだ未熟だ。一人で判断して悪人を裁くには危険すぎる。
そこで、一定の期間、俺の元でお前を教育する。
それまでは、お前は見習いになるわけだ。いいな？」
綾野は那木の肩を強く掴んだ。
那木はしばらく考えた。
もしも、ここで渋ればもう2度とチャンスはないだろう・・・と。
先ほどの格闘のせいで温まった体がまた冷えてきた。
汗のせいで先ほどよりも寒さが増している。
このまま外で過ごすには、体が許してはくれないだろう。
「・・・わかった。了解した」
そう言って那木は自分の両腕をさすった。
綾野も、那木の言葉を確認すると、自分の手をポケットの中に入れた。
「で、とりあえず、一番初めにM．I．C．E．の見習としては

どうすればいい？」

那木は震えた声で言った。

綾野は小刻みに足踏みをしながらその場をぐるぐる回って、そして止まった。

「とりあえず、早いところ俺んトコ来い。詳しい指導はそれからだ」

「了解」

那木がそう返事をすると、二人は肩をすぼめて大急ぎでその場を去っていった。

8、綾野と那木（後書き）

最後までお読み戴き有難うございました。

この作品は２００２年に書いたもので、今読むと多少時代が古い感じもあるかと思いますが、大体その辺りの時代設定になるかと思います。

私自身は小説を読むのは余り得意ではないのですが話を思い描くのが好きでして、最初は漫画家になろうと出版社に持ち込みまでして頑張っていたのですがどうにもこうにも絵の才能がないらしく、ただストーリー構成などは評価いただいていたので、それでは文字で書いてみようと思って書いてみたのがこの作品です。

あんまり細かい描写や書き込みで重厚感を持たせるよりは、読みやすい・入りやすい文章を書けたらなぁという形で書いております。実際はお読みいただいた方がどのように受け取るかで変わってくるとは思うのですが・・・

他の作品や続きも掲載できたらと思っております。

最近はなかなか気持ちが落ち着かなくて新作を書こうという状態ではないですが、そのうち落ち着いたら書こうと思っております。

この作品の続きも頭の中では案はあるんですけどね・・・

どうぞこれからも宜しくお願いいたします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7340e/

Hard Beat　1st

2010年11月18日06時29分発行